

# 野口英世 記念会報

第 68 号



# 目次

巻頭言	1
野口英世記念感染症ミュージアムオープン	2
日本初の感染症に特化したミュージアムづくり	4
稲垣 美麻	4
ペスト・梅毒・結核―忘れられた感染症大流行の記録	7
竹田 美文	7
ウイルス学から見る感染症ミュージアム	11
倉根 一郎	11
寄生虫病 人間臭い不思議な感染症	14
太田 伸生	14
第65回野口英世記念医学賞	17
野口英世記念医学賞を受賞して	19
山崎 晶	19
野口英世記念奨学生	23
第28回野口英世博士顕彰記念少年科学賞	27
令和4年度野口英世記念会賞	28
令和4年度野口英世記念高等学校自然科学系部活動助成事業	28
野口英世博士顕彰記念事業	29
第61回野口英世博士顕彰記念作文コンクール	30
野口英世記念館の動向	33
企画展 描かれた野口英世	
青いハンカチ運動 屋上に展示	
第94回野口英世博士命日祭	
アパルウ駐日ガーナ共和国大使来館	
緑の少年団花苗寄贈	
救世観音祭礼	
生家の囲炉裏を修復	
第146回野口英世博士誕生祭	
野口英世の後輩たちが年中行事を体験	
さとうきび親善大使来館	
各地で行われたイベント	
「MONEY 紙幣に登場する偉人と科学」展開催	
猪苗代の玄関口で野口英世をPR	
いなわしろフェスティバルで野口だるまの絵付け	
第21回心の手紙コンテスト「母から子への手紙」	38
母から子への手紙―思いを伝える機会をいただいて	40
中村 裕子	40
野口英世生誕150年に向けて	42
出前授業に行きます！	44
令和4年度の受け入れ資料	49
令和4年度 主な行事	50
令和5年度 主な行事予定	51
出前授業のご案内	51
ご寄付のお願い	52
野口英世記念館・感染症ミュージアム案内	
表紙 感染症ミュージアムテープカット	
裏表紙 オープンした感染症ミュージアム	

## 巻頭言

令和4年は野口英世記念会にとって記念すべき一年となりました。野口英世記念感染症ミュージアムが完成し、令和4年7月1日多数の皆様のご列席をいただきオープニングセレモニーを挙行し開館しました。さらに、同日は地元猪苗代町の皆様を招待した内覧を行い、翌2日から通常の営業を開始しました。

本ミュージアムは我が国で唯一の常設感染症ミュージアムです。竹田美文前理事長の時代から計画を進めてきたものであり、設計から完成まで多くの方々のご支援により完成したものです。この場を借りて厚くお礼申し上げます。「感染症の過去と現在を未来につなぐ」をキーワードとして、過去から現在まで人間が築き上げて来た感染症の知識と経験とともに、現在から未来に向けた感染症研究の新たな歩みも示されています。

7月の開館以来、毎週多くの来訪者があり、11月までの開館5ヶ月において約2万人の皆様に来館いただいています。感染症の歴史を6分間に纏めた円形スクリーンの映像とともに、スマートフォンを用いた日本語および英語音声ガイドも備えています。ぜひ多くの皆様においでいただき、感染症の理解に繋げていただくようお願いいたします。

コロナウイルス感染症のため、過去2年大きく減少していた野口英世記念館の年間入場者数も、令和4年は回復傾向を見せています。新型コロナウイルスパンデミック以前、令和元年の約7割まで回復しており、ポストコロナにおける新たな形の社会活動の始まりが感じられます。

野口英世記念会は、これまでと同様、生家の維持保存と公開、記念医学賞の授与、記念奨学金の貸与・給付、記念少年科学賞の授与を柱として、地域と連携した活動を継続します。野口英世の人生・業績を小学生にも知ってもらおう取り組みの一環として行っている小学校への出前授業も令和4年は198校を数え、福島県、宮城県、新潟県のみならず東北他県、関東からの依頼を受けています。野口英世の生涯は時代を超えて現代の小学生にも強く語りかけているのです。

野口英世記念会は、感染症ミュージアムの開館により、野口英世記念館とともに二つの展示館を有する新たな時代を迎えました。これまで取り組んできた活動もさらに発展させ、感染症に対する人類の歩みを支援し貢献する活動を本年も力強く続けます。今後とも、皆様のご支援ご鞭撻をお願いいたします。

令和5年4月1日

公益財団法人 野口英世記念会

理事長 倉根 一郎



# 野口英世記念感染症ミュージアムオープン

2022年7月2日、日本初の感染症に特化した博物館として「野口英世記念感染症ミュージアム」がオープンいたしました。

2019年末より急速な拡大を続けた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、瞬く間に世界中に広がるパンデミックとなり、多くの人命を奪い、社会全体の生活様式も大きく変容させるものとなりました。その一方で、これまで過去に繰り返されてきた感染症と人間の闘いの記憶を現代に呼び起こす出来事ともなりました。

そのようななかで、当公益財団法人野口英世記念会では、過去から現在まで人間が築き上げてきた感染症の知識と経験、さらに未来に向けた歩みを伝える場として、感染症に特化したミュージアムを設立いたしました。

感染症ミュージアムの設立趣旨は次のように記されています。

感染症の過去と現在を未来につなぐ

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックは、過去に繰り返された感染症と人間の闘いの記憶を、現代社会に呼び起こす出来事となりました。

有史以来、多くの感染症が幾度となく猛威を振るい、多くの命を奪ってきました。近代医学は感染症の克服に挑んだ人間の英知と努力とともに進歩し、多くの感染症を制圧しました。

しかし、20世紀半ばから新たな感染症が次々と出現し、われわれの新たな脅威となつていきます。さらに、今後も未知の感染症の出現が予想されます。こうした状況の中でわれわれ一人ひとりにできること、それは、感染症に対して「正しい知識に基づき行動する」ことです。

このミュージアムは、過去から現在まで人間が築き上げてきた感染症の知識と経験、さらに未来に向けた歩みを伝える場です。

皆様の感染症に対する新たな一歩が、今日このミュージアムから始まります。

2022年7月1日

公益財団法人野口英世記念会

この設立趣旨のもと、感染症についての基礎的な知識、感染症の歴史といま、そして未来をワクチンの開発の歩みや実用化された新技術を含め映像やパネル・展示などで来館者に伝えています。ぜひこの記念館で今後への新たな一歩を踏み出していただけだと思います。



感染症ミュージアムのお披露目となった内覧会

## オープニングセレモニー（7月1日）

2022年7月2日の一般公開に先駆け7月1日にはオープニング式典が執り行われました。

当会理事長倉根一郎の挨拶、来賓の猪苗代町長前

後公様による祝辞に続き、ミュージアムのオープンを祝すテープカットが行われました。式典の後には関係者や報道陣、地元町民を招待した内覧会が催され感染症ミュージアムのお披露目となりました。

### 一般公開（7月2日）

正式なオープンとなる7月2日には報道や新聞広告などを見てオープンを楽しみにした多くの方々がミュージアムを訪れました。

一般公開初日の来館者第一号となったのは栃木県からお越しくださった山本淳一さんのご家族で、記念品としてに野口英世だるまがプレゼントされました。



来場第一号となった山本さんご家族

た。山本さんは「コロナ過での心配が続く中なので、大変興味深く観覧することができた」と感想を述べられています。

### 来場1万人を突破（8月26日）

ミュージアムではその後も多くの方が来館くださり、夏休みになるとご家族で来館くださる方も多くなりました。オープンから86日目の8月26日には早くも来場者数が1万人を突破いたしました。

1万人目にご来場いただいたのは栃木県からお越しくださった桐原莉奈さん・玲奈さんの双子の姉妹でした。ご家族で猪苗代に観光に来てくださり記念



来場1万人目となった桐原莉奈さん・玲奈さんご家族

館と感染症ミュージアムにも立ち寄ってくださいました。

お二人には記念品として野口英世だるまとTシャツが贈られました。「1万人目と聞いてとても驚きました。もらった野口英世だるまがとてもかわいくてうれしいです。感染症ミュージアムはウィルスの画像がたくさん見られてたのしかったです。」と感想を話してくれました。

### 子どもも楽しめる

### 感染症ミュージアム

秋になり教育旅行の学校団体も多く入館されるようになりました。

感染症の歴史や専門用語など少し難しい内容も含まれているため、展示のポイントを楽しみながら学べるワークシートや、各自のスマートフォンやタブレットで展示解説を無料で受けられる音声ガイド（日本語・英語）も準備し、子どもから大人まで多くの方が楽しみながらご覧いただけるようになりました。

今後もすべての人が感染症に対して「正しい知識をもち、それに基づいて行動すること」ができるよう情報の発信を進めてまいります。

感染症ミュージアムの落成にあたり設計施工を担当した株式会社乃村工藝社や工事関係者のみなさま、資料や画像を提供くださいました関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。今後、来館者に満足いただけるミュージアムを目指して努力を続けたいと思います。

# 日本初の感染症に特化したミュージアムづくり

株式会社乃村工藝社

稲垣 美麻



## 感染症の過去と現在を未来につなぐために

新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起こってから初めて行動制限のない夏休みを迎えようとしていた2022年7月1日、野口英世記念感染症ミュージアムが開館しました。弊社は、至誠館の建築改修と展示工事に携わらせていただきました。

感染症に関する展示は、企画展示としていくつかの博物館で行われていましたが、感染症に特化した常設のミュージアムは日本初と言えます。前例のないミュージアムのコンセプトを野口英世記念会のミュージアムワーキング部会のみなさまと何度も協議させていただきました。

感染症と人間の関わりをひも解くと、人間にとって大きな脅威でありながら、たゆまぬ努力によって克服してきた長い歴史がみられます。本ミュージアムでは、その歴史的事実を丹念にたどり、感染症は克服できるということを知っていただくこと、そして来館者一人ひとりが自分にできる行動を考えるきっかけの場とすることを目指しました。こうしたミュージアムのコンセプトは、「感染症の過去と現

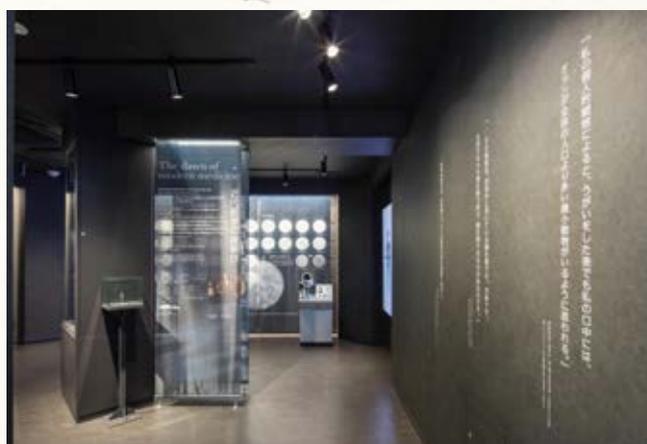
在を未来につなぐ」と題された、受付横のメッセージに集約されていますので、是非読んでみてください。

## 展示の概要

展示を具体的ににつくっていくにあたっては、感染症という専門的な内容を、可能な限り理解しやすく伝えることに注力しました。展示の大きな流れをご紹介します。

### 第1室・感染症とは何か

目に見えない小さな病原体の世界であることを感じさせる、黒を基調とした異空間のような場をつくりました。感染症が、正体不明の病だった時代を経て、原因が解き明かされていく近代医学の黎明期から始まり、感染症の基礎的な知識を伝える展示です。



第1室 感染症とは何か

### 第2室・感染症と人間の闘い

社会、歴史を一变させてきた感染症という脅威に人間がどのように対抗し、そして克服してきたか、9つの感染症を中心に見渡す展示です。病原体の世界を表現した第1室から、人間をはじめとした生き物へと視点を移し、第1室とは対照的な白を基調とした空間となっています。

入り口のシアターを出ると、感染症と人間の歴史そして今がわかるグラフィックウォールが続きます。専門的な情報がつまっていますが、できるだけ一般の方向けに興味を持っていただけるようなエピソードをピックアップし解説するように心がけました。



第2室 感染症と人間の闘い

中央は、感染症を終息させる切り札となるワクチンの解説です。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの対応においてもワクチンは重要な存在であり、関心の高い予防法として大きく取り上げていきます。そして、感染症と人間の関係はこれからどうなっていくのか、新型コロナウイルス感染症を経て見えてきた、新技術や今後の技術革新の展望に触れ展示は終わります。



感染症終息の切り札 ワクチン

### メッセージシアターで伝えたかったこと

感染症と人間の闘いの歴史をたどる中で、私たちが改めて認識したのは、20世紀の半ばから感染症の脅威は新たな段階に入っていたということでした。私たちの暮らし方が新興・再興の感染症を引き寄せ、そこから逃れることはもはや難しく、今後でも感染症のパンデミックが発生する可能性を前提にそれと向き合う必要があると伝えることも展示の重要な役割であると考えました。展示の中心となっている、第2室のメッセージシアターでは、このメッセージをわかりやすく伝えていきます。感染症が多くの人命を奪う手の打ちようがない脅威だった時代から、制圧

できると思いはじめたという大きな歴史を語りながら、未知の感染症が次々と現れ、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという現在を経て、人間と感染症は新しい関係性を築く入り口に立っていることを感じさせる大型映像です。



メッセージシアター

### ここだけのおすすめオリジナル展示

感染症の専門家が揃う記念会が、知識と経験の総力を結集してつくった本ミュージアムには、オリジナル展示がたくさんあります。その主なものをご紹介します。

### ① スワンネックフラスコ



スワンネックフラスコ

第1室、パスツールが使用したフラスコのレプリカです。近代医学の祖と言われるパスツールが、生物の病気に微生物が関係することを証明した歴史的な実験で使用した道具で、感染症研究の幕開けを象徴するシンボリックな展示となっています。フランスのパスツール研究所には今もその実験に使用された本物が残されています。

### ② 病原体のいろいろ

第1室、感染症の病原体画像が一望できる展示です。ミュージアムワーキング部会のみなさまの伝手をたどって集めた画像で、寄生虫からウイルスまでがこれほどそろった資料を一般的に見る機会意外に少ないので、じっくり見て、比較してみてください。動物でも植物でもない病原体の形の不思議さや

種類の多さから、感染症がいかに多様で複雑な病気であるかわかるのではないかと思います。



病原体の形が比較できる

### ③ 病原体を媒介する節足動物標本

第2室、終盤のケース内の展示です。ノミやシラミ、ダニなど、あまりじっくり観察する対象ではない小さな虫たちの姿が見られる貴重な展示です。特に、キチマダニ、フタトゲチマダニの標本は、このマダニが媒介する病原体による主な疾患の日本紅斑熱発見者である馬原文彦先生から直接入手したもので、その意味でも貴重なものです。

また、ヒトスジシマカの標本はこの展示用に新しく製作してもらったものです。病原体を持っていない標本とするため、研究室の中で孵化、飼育された

個体から製作することになり、開館際にこの標本展示はヒトスジシマカの成長待ちに。ヒトスジシマカは順調に成長してくれ、ミュージアムオープンに間に合って本当に良かったです。



節足動物標本の展示

### おわりに

ミュージアム開館直後、サル痘という動物由来感染症の流行がニュースになりました。また、2022年12月の現在でも、新型コロナウイルス感染症の流行は続いています。展示の最後で触れているように、新興感染症や再興感染症との終わりなき闘いを目の当たりにし、本ミュージアムの存在意義がこれからさらに増すことを実感しました。そのような意義深いミュージアムづくりに携わることができ大変光栄でした。理事長はじめ理事のみなさま、そして竹田前理事長にこの場をお借りして感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

# ペスト・梅毒・結核

## 「忘れられた感染症大流行の記録」

元国立感染症研究所 所長  
前公益財団法人野口英世記念会 理事長

竹田 美文



わが国の感染症対策の基本である感染症法（正式名：感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律）は、109種類の感染症を対象としている。そのうち54種類が細菌感染症である。これらの細菌感染症には、有史以前から現在に至るまで存在するもの、新興感染症として近年に発見されたもの、世界的に大流行を起こした（あるいは、現在も流行している）もの、わが国には患者数が少ないものの、つつが虫病、野兔病、腸炎ビブリオ感染症、日本紅斑熱など、わが国で発見されたものなど、いろいろのカテゴリーの感染症が含まれている。野口英世記念感染症ミュージアムでは、これら数多い細菌感染症のなかで、世界大流行を起こしたペスト、梅毒および結核をトピックスとしてとりあげ、関連する写真を展示し、解説している。

### ペスト

ペストは、ペスト菌を持った野ネズミなどに寄生しているノミに咬まれて感染する。腺ペスト、敗血症型ペストおよび肺ペストの3つの病形があるが、いずれも発症すると死亡する割合が高く、歴史上どれほどの人々が犠牲になったか、正確な記録がない。



ペストの展示

ペストの世界大流行は3回記録されている。第1回世界大流行は、541年から750年にかけて、

エジプトに端を発し地中海沿岸諸国から北西ヨーロッパに及んだ。東ローマ帝国の首都ビザンチンでは、流行の最盛期の3ヶ月の間、毎日5,000人〜10,000人の死亡者が出たと伝えられている。

第2回世界大流行は1345年に始まり、数世紀にわたってヨーロッパをペストの恐怖に陥れ、2,500万人とも4,000万人ともいわれる人が死亡した。当時のヨーロッパの人口は約1億人と推定されているので、人口の約4分の1から2分の1に近い人が、ペストによって死亡したことになる。

当時のヨーロッパは農耕社会であったため、多くの農民が死亡したことにより、産業構造が大きく変わることになる。

第3回世界大流行は、19世紀中頃に中国の雲南省で発生した。1894年に香港に侵入すると、折からの蒸気船の発達によって、一気にアジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカなどに拡大し、まさに文字通りの世界大流行となった。1950年頃に流行が収まるまでに、世界の死亡者は1,350万

ないし1,500万人と記録されている。

わが国は幸い大きい流行を免れた。最初の侵入は明治32年（1899年）で、翌年までに神戸と大阪で約50人の患者が報告された。次いで明治38年（1905年）に、神戸と大阪で流行が再燃し、特に大阪の流行は大阪市のみでなく、明治43年（1910年）に終息するまでに、大阪府下の市町村に蔓延した。さらに四国4県や中国、九州からも患者が出た。この間の患者総数は2,000人を超えた。その後、明治44年（1911年）以降大正年間、大きい流行はなく、わずかに大正5年（1916年）から翌年にかけて、三重県と愛知県で約100人の患者が発生した。最後の患者の発生は昭和4年（1929年）で、インドおよび香港およびフランス領インドシナ（現在のベトナム・ラオス・カンボジアを合わせた領域）から大阪港に入港した2隻の貨物船のそれぞれの船員各1人が発症し、前者は死亡したと報告されている。

第3回世界大流行が拡大中の19世紀後半、ヨーロッパで近代医学が勃興した。微生物の自然発生説を否定したフランスのルイ・パストゥールと結核菌を発見したドイツのローベルト・コッホがその立役者だった。明治政府は、近代医学のわが国への導入を、東京大学医学部を卒えた北里柴三郎に託した。北里は、明治19年（1886年）から足掛け6年、ベルリンのコッホの研究室で過ごし、明治25年

（1892年）に帰国後、福澤諭吉が創設した私立伝染病研究所（現・東京大学医学科学研究所）の所長に就任した。そしてその2年後の1894年、ペストが流行中の香港に赴き、ペスト菌を発見した。



コッホの研究室での北里柴三郎  
〔「破傷風菌の純粋培養成功を記念して」提供：学校法人北里研究所北里柴三郎記念室所蔵〕

ともにヨーロッパに拡がったといわれている。わが国では1512年に最初の梅毒患者発生の記録が残っている。おそらく中国から入ったものと考えられている。

梅毒は、梅毒トレポネーマが性行為によって局所（性器や咽頭）の粘膜から感染する。病期を通常4期に分ける。第1期は感染の3〜6週間後、感染局所に丘疹（盛り上がった発疹）が出る。痛みはなく、やがて潰瘍になり、治療しなくとも数週間で症状が消える。第2期は感染の約3か月後、手のひらや足の裏をはじめ全身の皮膚や粘膜に発疹が出る。この発疹も数週間から数か月で消える。第1期〜第2期の間にペニシリンなどの抗生物質を投与すれば治癒する。感染3〜4年後、時には10年以上経って第3期〜第4期になると、心臓、大血管、脳、脊髄などが侵される。第4期には、脊髄が侵される脊髄ろう、脳が侵される麻痺性痴呆となり、神経梅毒と呼ばれる。

秦佐八郎と野口英世は、梅毒の研究において大きい功績を遺した。秦佐八郎が伝染病研究所に入所したのは明治31年（1898年）、北里柴三郎の下でペスト防疫の実績を上げた後、1907年にドイツへ留学し、ポール・エールリッヒとともに梅毒の治療薬・サルバルサンを開発した。サルバルサンは、1940年代後半のペニシリンの発見・実用化まで、梅毒の治療薬として多くの患者を救った。

## 梅毒

梅毒は1492年のコロンブスの新大陸の発見と

いつぼう野口英世は、1913年、ロックフェラー  
医学研究所において、神経梅毒で死亡した患者の脳  
中に梅毒トレポネーマを見つけた。梅毒の末期に脳  
が侵されて精神異常となることはわかっていたが、  
その医学的根拠を解明したこの業績は、国際的に高  
く評価され、1914年と1915年のノーベル生  
理学・医学賞の最終候補になった。



1900年の野口英世の渡米に際して、  
左端が野口英世、中央が秦佐八郎

わが国の梅毒患者は、現在急激に増加している。  
2021年の患者数は7,837人、2022年  
は12,966人となっていて、感染症法に基づく  
調査が始まった1999年以降で最多を更新してい  
る。

## 結核

結核は、患者の咳などによって排出される結核菌  
が原因の空気感染である。感染から症状が出るまで  
の期間が長いことが特徴で、発症までに多くの場合  
は1〜2年くらい、時には10年以上にわたることも  
ある。肺の感染（肺結核）がほとんどであるが、リ  
ンパ節、脊椎、関節、腎臓、膀胱などで病変を起こ  
すことがある。肺結核の主な症状は、微熱、咳、痰、  
倦怠感などで、重症になると痰に血液が混じり、かつ  
血（咳とともに血液が吐き出されること）をするこ  
とがある。

結核は旧石器時代から確認されているが、欧米を  
中心に世界的に大流行するのは、18世紀以降、都市  
化、産業化が進展したことによる。わが国では、明  
治維新後、産業の近代化を目指すなかで流行が拡大  
し、昭和の中頃まで常にまん延していた。1935  
年頃の国内の15〜34歳の結核による死者は年に  
8万人を超えていて、同年代の死者の6割以上に達  
していた。第二次世界大戦の前後にかけては、その  
流行のすさまじさから、国民病あるいは亡国病とも  
呼ばれ、1950年までは死亡原因の第1位を占め  
ていた。ちなみに、1950年の死亡者数は  
121,769人、死亡率（人口10万人中の死亡者）  
は146.4だった。

1944年にセルマン・ワックスマンが結核菌に

有効な抗生物質・ストレプトマイシンを発見した。  
わが国では1950年代前半に実用化され、それ以  
降患者数が減り始めた。さらに1957年の梅澤濱  
夫によるカナマイシンの発見・実用化もあいつて、  
患者数・死者数とも激減した。しかし現在でも結核  
は重要な感染症である。2021年の患者数は  
11,519人、死者数1,844人で、感染症法が  
対象とする109種類の感染症の中で、インフルエ



富士見高原サナトリウム（現・長野県富士見市）で日光療法を行っている堀辰雄  
（右から3人目）（提供：JA長野厚生連富士見高原病院）

ンザと新型コロナウイルス感染症を除くと、死者数が最も多い感染症である。

結核が大流行した明治・大正・昭和の時代にかけて、多くの文学者が若くして結核で斃れた。樋口一葉が24歳、石川啄木が26歳、高山樗牛が31歳、正岡子規が35歳、国木田独歩が37歳、宮沢賢治が37歳という若さだった。比較的長生きした堀辰雄も亡くなったのは49歳だった。これらの人たちは、悲しき玩具（石川啄木）、病牀六尺（正岡子規）、風立ちぬ（堀辰雄）など、結核を主題とした名作を遺している。

### 忘れられた感染症大流行

明治45年に出版された富士川游の「日本疫病史」は、「史籍に疫病流行の事の記録せられたるは、崇神天皇5年（93）を以て最初とす」と記述している通り、飛鳥時代からの「国史、記録、その他の書類」を丹念に調べ、わが国の感染症流行の歴史を詳述した貴重な文献である。扱っている感染症は、天然痘、水痘、麻疹、風疹、コレラ、流行性感冒（かぜ）、腸チフス、赤痢の7種類である。

私たちは、飛鳥時代から奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、そして江戸時代を経て現在まで、無数ともいえる感染症の流行に晒され、多くの命を落とした。その事実を忘れてはいないだろうか。

1979年、アメリカの歴史学者アルフレッド・クロスピーは、1918年〜1920年に世界的に大流行したスペインかぜに関する詳細な記録「流行と平和、1918」を出版した。名著である。その新版を1989年に出版した時、クロスピーはタイトルを「America's Forgotten Pandemic」（アメリカが忘れていた世界大流行）と改題した。日本語版「史上最悪のインフルエンザ―忘れられたパンデミック」は高名なウイルス学者・西村秀一の訳でみず書房から2004年に出版された。それによるとクロスピーは、（アメリカで）人々が大流行からわずか50年後にスペインかぜのことを何故忘れてしまったのか、その理由を「大流行に関係しそうな記録などが……ごく貧弱にしか残っていないからである」と憶測している。

野口英世記念感染症ミュージアムは、人類の歴史上で、人々を恐怖に陥れ、人々がその制圧のために闘った「忘れられた感染症の記録」を、新型コロナウイルス感染症大流行に直面する今を生きる人々に、そして後世の人々に伝えるものである。



第1室 感染症とは何か

# ウイルス学から見る感染症ミュージアム

前国立感染症研究所 所長  
公益財団法人野口英世記念会 理事長

倉根 一郎



## はじめに

令和4年7月1日に開館した野口英世記念感染症ミュージアムは、過去から現在まで人間が築き上げて来た感染症の知識と経験とともに、現在から未来に向けた感染症研究の新たな歩みを伝えることを目的としています。

ウイルスは細菌や寄生虫に比べると発見も遅く研究の歴史の浅い病原体です。しかし、ウイルスによる疾患自体はウイルスの発見以前から存在し知られていたものがあり、ウイルスの発見によってその原因が明らかになってきたわけです。

一方、毎年のように世界的流行が起こるインフルエンザや、2019年暮れに新たな感染症として認識された新型コロナウイルス感染症パンデミックによって、一般の人々のウイルスに対する関心やワクチンに対する期待が非常に高くなっていると思われます。

また、野口英世も原因となる病原体を探った黄熱、あるいはエボラ出血熱、デング熱等、名前は知っていてもどのような病気かの理解が十分にはなされて

いないことから、むしろ“恐怖の対象”として見られることも多いと思われます。本感染症ミュージアムでは、どの年代の方にも、ウイルスおよびウイルス感染症に対し正しい理解を持ってもらうため、わかりやすい展示と説明がなされています。

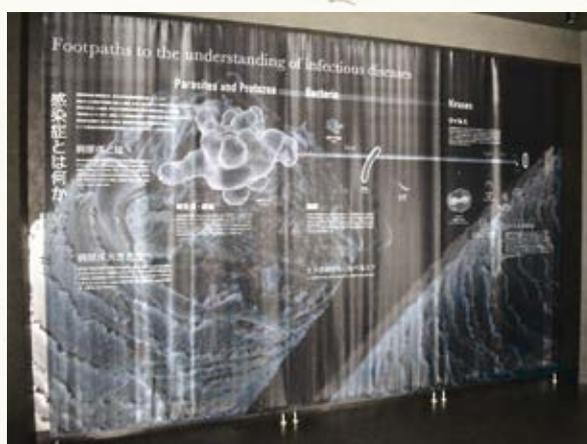
## ウイルスの基本情報

ウイルスは最も小さな種類の病原体であり、通常の顕微鏡では見ることができず、電子顕微鏡を用いることで初めてその姿を見ることができるようです。

ウイルスの大きさをあらわす場合、その単位としてナノメートル（1ナノメートル＝1ミリメートルの100万分の1）という日常生活であまり使われない単位が使われます。小さすぎるため、そのサイズ感をどのように示すかは難しいのですが、ミュージアムにおいては、毛髪の太さとの比較、細菌との比較によって、その小ささを実感してもらうことが可能となっています。

また、具体的に、ウイルスによっておこる感染症にはどのようなものがあり、原因ウイルスはどのよ

うな形をしているか電子顕微鏡写真が展示されています。



ウイルスの大きさを実感できる展示

## ウイルスの感染と感染症

“ウイルスの感染” “ウイルス感染症” という言葉はほとんどの人が何気なく使っているのですが、その理解はヒトによって異なっており、同じ言葉を

使って会話していてもお互い意味することが違っていることがあると思われれます。

厳密には、ウイルスがヒトの体内に入っただけの状態は感染ではなく、“侵入”であり、侵入したウイルスが体内で増え（“増殖”といいます）て初めて感染と呼ばれる状態になります。さらに、ウイルスが感染しても、全く症状を示さないことも多く（不顕性感染といいます）、この場合は感染症ではありません。症状が出現して（病気となって）初めて“感染症”となります。

このような理解は、ウイルス感染症を理解するうえで非常に重要な事柄であることから、別途展示により示し強調しています。

### ウイルスによる新たな感染症（新興感染症）

近年、多くの新たな感染症が発生し、我々にとって大きな脅威となっています。新たに発生している新興感染症の病原体を見ると、その多くが動物由来の病原体による感染症であり、さらにその多くはウイルスであることがわかっています。

インフルエンザウイルスや新型コロナウイルス等一般の人々が日常生活においても頻繁に耳にし、情報を得ることが比較的容易なものもありますが、例えば、エボラウイルス、ラッサウイルス、ニパウイルス等、感染した場合の致死率が高く、情報を得る機会が少ないことから、その実態を知らないことによる“怖さ”が先に立ってしまうことも多いと思われ

れます。

本ミュージアムにおいては、9つの感染症を歴史も含め別個に詳記していますが、ウイルス感染症としては世界的にも大きな問題となっているインフルエンザ、HIV/エイズ、新型コロナウイルス感染症、動物由来感染症を個々取り上げて解説しています。



新型コロナウイルスの展示

### ワンヘルスの考え方

近年の動物由来感染症（人獣共通感染症）を理解するうえで、各種病原体がヒトにどのようにして感染しどのような感染症を引き起こすかということのみでなく、我々人間を取り巻く環境、そして我々が共に存在する動物、という3つの要素の関連性を理解することが大切です。

近年の新興感染症の多くは、本来自然界の動物が持っている病原体によって起こっています。以前は、例えばこのような野生動物（例えばコウモリ、サル

等）と人間が日常生活の中で接近することはあまりなかったのですが、人間の生活区域が拡大したり、自然環境の破壊によって、ヒトと野生動物が接する機会が増えたために、野生動物が持っているウイルス（多くの場合これらのウイルスによって野生動物は病気にならない）が人間に感染する機会が増えてしまいました。従って、新たな動物由来感染症の発生を抑えるためには、動物が（そして人間も）生活する自然環境が健全な状態に維持されることが大切です。このように、人間、動物とともに我々が生活する自然環境を一体として考え、この三つの要素を健全に保つ必要があるとする“ワンヘルス”という考え方が確立されていることを強調しています。



感染症の未来 ワンヘルスの考え方

人間に病気を起こす多くのウイルスを本来野生動物が有していることから、ミュージアムを訪れた人が、「野生動物は悪いもの」という印象・考えを持っているしまわらないよう、なぜ近年そのようなことが起こるようになってきたか、またなぜそうなったと考えられるかを、簡素で正しいメッセージとして伝えることが重要と考えています。

## ワクチン

ワクチンが感染症に対する予防において重要な役割を有することは言を俟ちません。ワクチンの重要性は多くの皆さんが理解されていると思われま

す。最初に開発された「ワクチン」は、重篤な症状と高い致死率を有する天然痘に対する予防法としての、ジェンナーによる1796年の種痘の発見であることから、その歴史的経過も含めて詳細に展示しています。

その後開発された天然痘ワクチンを用いた、世界保健機関（WHO）を中心とした努力により、天然痘ウイルス（痘瘡ウイルス）は人間が根絶することに成功した唯一のウイルスとなりました。根絶に至る経過、そのために果たしたワクチンの役割は感染症に対する人類の歴史において忘れることのできない金字塔となるとともに、その後続く多くのウイルスワクチンの開発・実用化に向かうスタートともなっています。

その後ワクチン開発は大きな発展を遂げ、他のウ

イルスに対するワクチン開発や、新型コロナウイルスに対する遺伝子ワクチン等の迅速な開発にもつながっています。



ワクチンの展示

## 終わりに：ウイルス感染症の未来

今日、感染症対策の基盤となる研究は、過去のウイルス研究とは異次元の領域へと向かっています。近年発展した免疫学や分子生物学との連携によって

大きく進展してきたウイルス学は、さらに細胞科学、数理科学、人工知能研究等との連携により飛躍的に発展し新しいウイルス学へと大きな変貌を遂げつつあります。また、情報科学や気候変動研究との連携はウイルス感染症対策を新たなレベルへと飛躍させます。

人間の長い歴史の中で、我々はウイルス感染症を科学的に解明し、ワクチンや治療薬を開発することによって対応を進めてきました。一方、我々のウイルス研究は近年他分野との融合による飛躍的な進歩により、新しい姿に変貌し、これまでには考えられなかったウイルス感染症対策をとることができる時代への入り口に立っています。

現在そして未来のウイルス学の一端を展示で見ていただき、来るべき時代に夢をはせていただきたいと思います。



展示室エントランス

# 寄生虫病 人間臭い不思議な感染症

東京医科歯科大学名誉教授 鈴木医療科学大学特任教授  
公益財団法人野口英世記念会 理事

太田 伸生



野口英世記念感染症ミュージアムは当記念会の新

たな社会貢献事業の一つとして大きな期待と使命を  
もって令和4年7月に開館しました。私は寄生虫感  
染症を担当した者として、このミュージアムの展示  
に寄せる想いを語らせていただきたく思います。

感染症ミュージアムの構想では若い人たちへの  
メッセージが重要だと竹田前理事長から伺った時、  
私の幼少期の経験を思い出しました。私が感染症に  
興味を抱くようになった契機は小学生低学年の時分  
でした。その頃の私は急性糸球体腎炎やジフテリア  
で入院療養を強いられました。当時の愛読書が  
「体のなぜなに」という本でした。60年以上前で、  
出版社や著者など今では確かめようもありません。  
その本で伝染病についての知識を得て、医師でも  
あった父親に伝染病の講釈を垂れていたことを思い  
出します。

さて、感染症ミュージアムの中で若い人たちにど  
のように寄生虫病を紹介したらよいか考えてみまし  
た。寄生虫だけの特徴、ウイルスや細菌にはない特  
徴は伝えたいと思いましたが、寄生虫病の人間臭さ

も知っていたかと思いましたが。寄生虫は私た

ち人間と同じ「真核生物」であり「動物」です。寄  
生虫という病原体は人間と似た生き物で、人間社会  
の中で同居人の様に振る舞ってきたのです。「人間  
に近い病原体」であることは、有効な治療薬開発が  
困難であることを意味します。なぜなら寄生虫を殺

すということは人間にも害を与えることになるから  
です。抗がん剤の場合と似ています。また、狡猾な  
寄生虫は何度でも感染しますからワクチンもできま  
せん。しかし私たちの先人は賢く勇敢に、寄生虫と  
付きあってきました。

感染症ミュージアムでは日本住血吸虫症とマラリ  
アの展示ブースが設けられました。その2つの寄生  
虫の歴史に触れると、寄生虫という同居者につい  
て少しだけ身近に感じていただけたかと思えます。

## 日本住血吸虫症から学ぶこと

寄生虫のうち、回虫やサナダムシなどは高度に進  
化した多細胞動物で蠕虫（ぜんちゅう）とよびます。  
生存のためには生育環境、栄養摂取など厳しい条件  
が必要ですから、寄生虫によっては生息地域が限定  
されることがあり、風土病であることが多いのが特  
徴でしょう。



日本住血吸虫症の展示

今回の展示にもある日本住血吸虫症も風土病です。この寄生虫の発育には必ず淡水産巻貝であるミヤイリガイが必要です。この貝が生息する地域にだけこの病気が流行します。日本住血吸虫症は甲府盆地、備後地方、筑後川流域などの風土病でした。感染の場は主に水田での農作業でしたから、農民は生活のために感染からは逃れられませんでした。日本住血吸虫症は主に肝臓を侵して死にいたる病気ですから、住民には大きな脅威でした。その特效薬開発は1970年代まで待たなければなりませんでしたが、今日でもワクチンはありません。

その日本住血吸虫症も1977年を最後に日本国内の流行は終焉しました。

私たちがそこから学ぶべきは、この病気をワクチンも特效薬もない条件で流行駆逐を果たした先人の知恵、勇気および実行力です。

流行地であった甲府盆地では、地域住民こそが病気の主体でした。明治時代に地域住民から病気の原因究明と予防治療法開発の切実な要求が中央政府に届きました。それだけではなく、住民行動の驚くべき行動もありました。例えば末期患者であった農婦は自ら病理解剖献体を依頼しました。その熱意こそが桂田富士郎の病原体発見や宮入慶之助による感染経路の解明となり、その後は地域住民一丸となって感染予防活動や学校と地域での衛生教育が徹底して進められました。

その結果、特效薬ブラジカンテルが臨床応用され

るより前に日本国内から日本住血吸虫症の新規感染がなくなったのです。公衆衛生活動だけで住血吸虫症の流行終焉を実現させたのは快挙であり、この成功は今日でも全世界から敬意と羨望を集めている事実を日本人は知っておくべきでしょう。

流行終息後も住民の強い警戒は続いていましたが、2003年をもって山梨県は行政活動としての流行監視事業を終了しました。



日本住血吸虫の中間宿主となるミヤイリガイ

### マラリアをめぐる先陣争い

ミュージウム展示に取り上げたもう一つの寄生虫病がマラリアです。病原体は蠕虫ではなく単細胞のマラリア原虫です。人間はハマダラカの吸血の際に感染し、発病します。現在でも熱帯、亜熱帯地方

で毎年50万人程度の人命を奪う重要な感染症です。マラリアもハマダラカが生息する地域でしか発生しないのですが、南極以外のどの大陸にもハマダラカがいますので地球上どこでもこの病気が存在します。ハマダラカは日本国内にも生息しています。

マラリアは高熱の原因になりますから、古くからその病気は歴史書に記述されていました。平清盛の死亡原因もマラリアが疑われています。

マラリア特效薬は比較的早くに発見されており、南米のキナ樹に解熱効果があることが知られて、スペイン人が略奪してヨーロッパに持ち帰ったのは17世紀でした。しかし、良質のキナ樹の争奪は大きな国際競争で、オランダ植民地であったジャワ島で最高品質キナ樹の大量栽培に成功したことでオランダは大きな富を得ています。

マラリアの病原体や伝播経路の同定は19世紀末以降でした。マラリア原虫を患者末梢血に見つけたのはフランス人Ravertanでした。ハマダラカが伝播することは1897年にイギリスの軍医Rossの業績とされ、彼はその功績でRavertanとともにノーベル賞を受賞しました。しかし、Rossの発見は鳥マラリアの感染経路についてであり、人のマラリアがハマダラカにより伝播されることはイタリア人Grassiがほぼ同時に発見しており、イタリアではGrassiこそノーベル賞受賞に値すると今日なお語られています。これも激しい国際競争でした。

マラリアの治療薬は人類の不幸な戦争とも深く関

係してきました。第二次世界大戦で日本敗戦の転機となったガダルカナル島はマラリアの濃厚流行地で、両軍の治療薬クロキン備蓄の差が運命を決定したとも言われます。今日世界中で使われている治療薬アーテスネットも、中国が1960年代にベトナム戦争に介入した際に毛沢東が新規マラリア治療薬開発を指示したことによります。この薬は紀元前から解熱剤として使われていた漢方薬の成分で、2015年に大村智博士とともにノーベル賞を受賞した中国の Youyou Tu 博士が、国を挙げた秘密研究で有効成分の抽出に成功しました。但し、開発に成功した時にはベトナム戦争は終結していました。治療薬に関しても激しい国際競争が繰り広げられてきたのです。



マラリアの展示

マラリアワクチンも開発競争が熾烈です。2021年にWHOはアフリカに限定して熱帯マラリアに対するワクチン (STIS) を推奨する見解を発表しました。これが公認された初のマラリアワクチンということになっていますが、予防効果は30%程度と低く、殺虫剤浸漬蚊帳の効果には及ばないのが実態です。従ってマラリアワクチン開発競争も決着がついたとは言えない状況で、将来に Ross と GSK の評価と似た事例が発生する可能性は十分にあるでしょう。日本はアフリカで殺虫剤浸漬蚊帳の普及に貢献しており、「ワクチンか？蚊帳か？」という競争にもなるのでしょうか。マラリアは人類の健康へのインパクトが大きい病気ですから、対策ツールの発見に関する先陣争いでも熱い国際競争が今後も続くでしょう。

### おわりに

野口英世記念感染症ミュージアムが若い世代の人たちに感染症の認識、興味、課題などを感じていただける場となることを祈っています。若い時に受けたインパクトがその人の将来の生き方を決めることにもつながるのです。「体のなぜなに」の読書体験を私は忘れることができません。同じ様な体験の場になって、次代の野口英世が生まれてくることを期待してやみません。



第2室 感染症と人間の闘い

# 第65回野口英世記念医学賞

野口英世記念医学賞は、野口英世博士が生前に行った研究に関係のある優秀な医学研究に対し、その功績を表彰するものである。

## 受賞者

大阪大学 微生物病研究所 教授  
農学博士 山崎 晶



山崎 晶 博士

## 研究課題

病原体糖脂質を認識する  
免疫受容体群に関する研究

## 受賞研究課題概要

結核菌が細胞性免疫を強く賦活化することは古くから良く知られています。とりわけ細胞壁脂質成分が強い作用を有することも山村雄一、東市郎博士らによって明らかにされていましたが、その作用機序は50年以上不明でした。

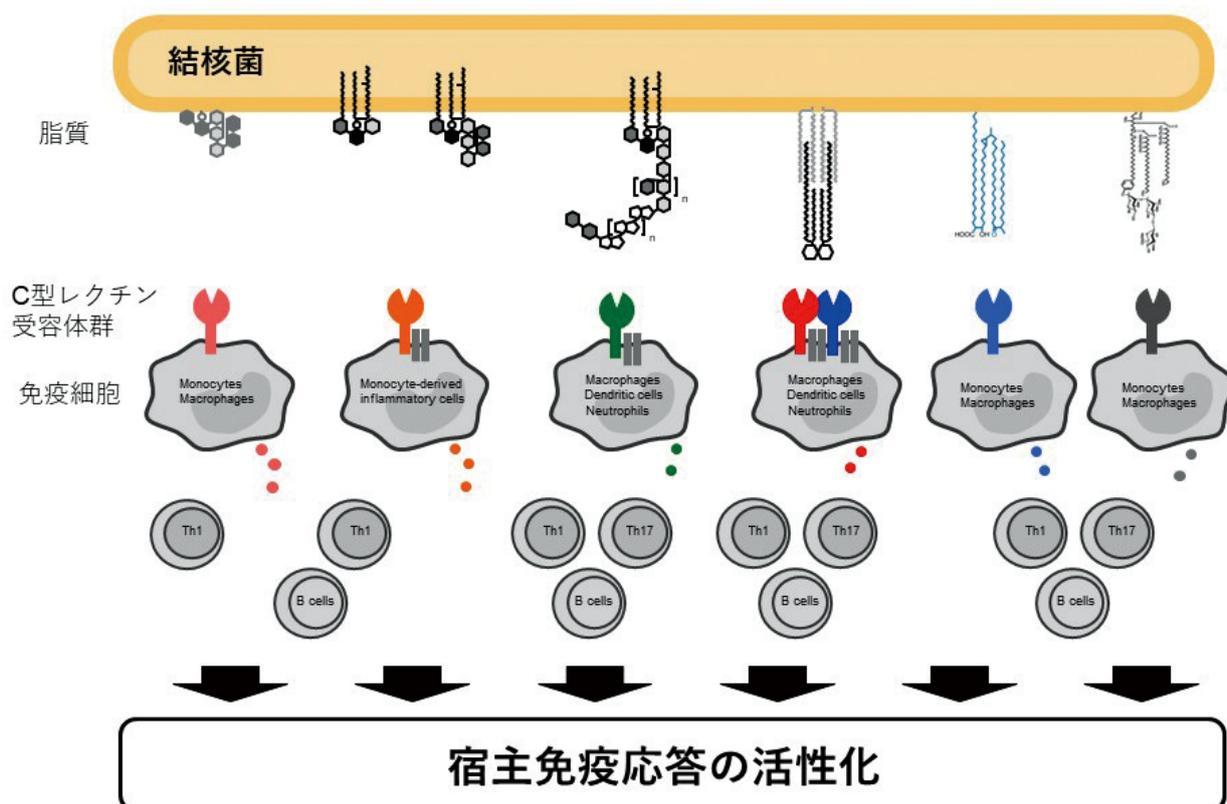
山崎晶博士は結核菌糖脂質を直接認識する自然免疫受容体として、C型レクチン受容体に属するMincle、MGL、Dectin-2、DCARを次々と明らかにし、長年の謎を分子レベルで解明しました。これらの受容体はマクロファージや樹状細胞の活性化を促し、結核菌に対する自然免疫、獲得免疫の形成に寄与することもわかりました。また、これらの受容体遺伝子は進化上遺伝子重複を経て遺伝子クラスターを構成し、類似した構造を持つにもかかわらず異なる脂質を認識できることから、病原体側の脂質組成の変化にも対応できる頑健性の高いシステムであることも示されました。

山崎博士はさらに、このレクチン受容体群が結核菌以外の幅広いスペクトラムの病原性細菌にも反応できることを示し、「病原体脂質認識受容体群」という新たな受容体ファミリーを提唱するに至りました。これらの受容体は脂質による宿主細胞性免疫賦活作用の分子実体を担うことから、受容体を標的としたアナログの開発を進め、ワクチンアジュバントとして優れた性質を有する新規化合物の開発に成功しました。現在、この化合物を活用した新たなワクチンの開発も推進しています。

以上のように、山崎博士は、一貫して感染症における免疫受容体の基礎研究を推進する一方でその応用研究にも取り組んでおり、今後の研究の発展と社会への貢献が期待できます。その業績は感染症の理解と免疫学の発展に大きく貢献するものであり、野口英世記念医学賞に相応しい独創的な研究であります。

## 受賞者の研究内容の概要

私たちの研究室では、からだを守る免疫システムの研究を進めています。中でも、病原体の感染や、からだの異変を速やかに察知する免疫受容体（レセプター）の機能の解明に注力しています。長い間人類の脅威であり続けている感染症に結核があり、結核菌の感染によって起こります。現在でも世界中で年間約1千万人が感染し、約百万人が亡くなっています。さらに近年、「結核の再燃」や「多剤耐性結核」などが深刻な問題になっていますが、結核菌の防御にはたらく生体側のしくみは良くわかっていませんでした。我々は、結核菌特有の脂質成分を認識して免疫系を活性化する受容体群（C型レクチン受容体群）が存在することを発見しました（下図）。



結核菌は、菌体の周囲に脂質でできた分厚い壁を持つことで免疫系の攻撃を受けにくくし、我々のからだの中でも長生きできることが知られています。一方、我々のからだは、対抗手段として、これらの特有の脂質を特異的に認識して、結核菌が入ってきたことを感知する機構を身につけました。我々は、その具体的な受容体群と認識分子を発見しました。これらの受容体は、結核菌に対する免疫応答を誘導するため、免疫系を活性化するはたらきを持っています。このはたらきを活用することで、ワクチンの効果を増強することが可能になります。我々は、より安全に、効果的にこれらの受容体を活性化する化合物を探索し、その開発にも成功しました。現在、この機構を活用した、新型コロナウイルスに対する副反応の少ないワクチンの開発も進めています。

一方、結核菌は、我々の免疫系を回避して、慢性感染を成立させることも知られていますが、その分子機構はあまり分かっておらず、今後の課題です。我々は最近、結核菌が、免疫系を抑制するような受容体に結合することで我々の免疫系を抑制し、防御応答を無力化する術を持っていることも見出しました。近い将来、その機構をブロックすることによって、「免疫系を回避させないようにする」戦略は、感染に対する免疫応答を高めることにつながり、重篤な感染症の克服にも貢献できるのではないかと期待しており、その実現を目指して研究を続けています。

# 野口英世記念医学賞を受賞して

山崎 晶

この度は、荣誉ある野口英世記念医学賞を賜り、公益財団法人野口英世記念会並びに選考委員の先生方、推薦下さいました大阪大学微生物病研究所岡田雅人所長に心より御礼申し上げます。感染拡大のため授賞式は中止となり、念願であった猪苗代湖畔に伺うことは叶わず残念でしたが、とりわけ、わざわざ大阪までご足労頂きました倉根一郎理事長には謹んで御礼申し上げます。

私には身に余る思いですが、受賞対象となった研究成果は、一緒に研究してきた若い研究者や学生たちが中心となって行い、新しい発見を積み上げてくれたものであり、この受賞が彼らの努力に対する正当で明確な評価として伝わり、今後の研究生生活の励みになるのであれば、心から嬉しく思います。

私は京都大学農学部で研究を始めました。体育会蹴球部が生活の中心だった私は、単純に「運動刺激による骨格筋肥大のメカニズムの解明」というテーマに惹かれ、栄養化学研究室を希望しました。

前年に関西一部リーグに昇格した我々は、

インカレ出場を目標に掲げて全勢力を注いでおり、卒業研究のテーマは、科学的なトレーニングの助けになれば、くらの気持ちでした。4年間サッカーのみの学生生活だったため修士には行こうと思いましたが、栄養化学は人気の研究室で残れるのは半分以下であり、4回生の夏には院試の準備にもある程度時間を割く必要がありました。ところが、自分に二兎を追える能力があるわけもなく、インカレはおろか二部降格、副将であった自身もスタメン落ちという状況で、院試だけ合格しました。こんなことなら留年して4回生でしかできないことを思い切りやれば良かったと後悔し、大きな挫折を味わいました。国内外の日本代表の試合も良く観に行っていました。その後しばらくはサッカーを見るのも嫌で、オフト時代の日本代表の戦績だけが私の記憶から抜けています。その代わり、有り余る体力を山に向け、南アルプスや北アルプスを歩き回りました。そうこうしているうち、こんな思いままでして選んだ道なので、少し真面目に研究をやってみるかと思うようになりました。

修士では電気刺激による筋肥大のモデルを用いてアンドロゲン受容体の解析を行いました。トリチウムラベルしたアンドロゲンを結合させ、液シンで受容体結合の増加の有無を測るという毎日でした。結合が弱く苦勞していました。少しずつ試行錯誤しながら系を最適化していくことで、最終的にとても綺麗なデータが取れました。生化学の実験とスカッチャードプロットという簡単な数式で、生体の振る舞いがある程度分かることに驚き、単純に面白いと思いました。

薫陶を受けた伏木亨助教授は常に自然体で、自由な発想と仮説でサイエンスを楽しむ人であり、サッカーで失敗して茫然としていた私に、こういう道もあるで、と教えてくれたような気がします。また、自然科学の中でも生物学は、仮説の立案や結果の解釈に進化的な考察を加えられる余地がある点で、大きな魅力を感じました。小さいながら論文にまとめることもでき、研究者という職業に次第に傾いて行きました。

当時はまだバブルの終わり頃で、日本企業

が基礎研究にどんどん参入している時代でした。修士修了後、進路をいろいろ考えた末に企業（三菱化成）の研究所を選びました。1つの理由は、面接官であった（その後上司となる）村松博士が論理的でアカデミックな考え方をする人で、基礎研究への深い理解を感じたからでした。実際、横浜の会社生活は楽しく、横浜や東京の生活を謳歌したり、神奈川県リーグでプレーを続けたり、また、研究も自分で考えて進められる恵まれた環境でした。

多様な能力の集団を組織としてうまく動かす企業のルールも学び、創薬のプロセスを一通り経験した貴重な時期でした。一方で環境に少し物足りなさも感じ始めた3年目、村松博士が国内留学を薦めてくれました。1つは東大医科研、もう1つはUCSFのArt WeisのラボでZAP-70をクローニングした岩島牧夫先生が日本の三菱化成生命研（L研）でラボを持つので、ということでした。最終的にL研に行くことになりましたが、L研は皆がサイエンスを楽しんでいる夢のような研究所で、免疫グループのトップは篠原信賢先生、そのもとに高垣洋太郎先生、高山大先生、岩田誠先生、岩島牧夫先生の4人のコアが各々の個性を發揮しつつ、同じフロアで互いにdiscussionしながら研究を進めている理想的な環境でした。中でも篠原先生の独自のサイ

エンスの見方、常にhighであること、研究を楽しむこと、log<sub>10</sub>の明確さ、などの全ての要素は私の人生観を変えました。篠原先生と江島耕二さん（現北里大学教授）、立花誠さん（現大阪大学教授）の4人で行く晩飯で篠原先生の話聞くのは毎日の楽しみでしたし、特に篠原先生の運転で西伊豆の戸田にタカアシガニを食べに連れて行って頂いたことは忘れられない思い出です。そして、将来はやはり基礎研究の世界に進みたいと思うようになりました。

そんな頃、当時篠原先生が米国での仕事を高く評価されており、L研へのリクルートも考えておられた「坂口君」という方が都立老人研でラボを持ち、研究員を募集していることを知りました。L研の電話ボックスから直接電話を掛け、西武池袋線の大山の研究所にインタビューに伺いました。制御性T細胞（Treg）を発表される前の坂口志文先生でした。投稿前だと言って見せて頂いた、CD25+CD4+細胞の抑制活性を示す棒グラフは今でも鮮明に覚えています。とてつもなく魅力を感じました。結局学位も持つておらず、最終的にお世話になることはありませんでしたが、やはりこういう世界に身を置きたいと強く思った体験の1つでした。そして、学位のない会社員の私でも、人の3倍やれば、1

年の派遣期間でも論文博士に値するような仕事ができるかも知れないと思い、他を犠牲にして時間を費やしました。約東の1年で総合研究所勤務に戻ることになりましたが、その後は勤務の後、夜はL研に通うという生活を数年続け、何とかT細胞抗原受容体のシグナル伝達機構に関する研究で論文博士を取るこ



歴代受賞者とともに展示された研究業績

学位取得後、6年勤めた会社を辞めてポスドクとして米国留学の準備を進めていたところ、篠原先生の千葉大時代の弟子であった斉藤隆先生が助手として誘って下さいました。

悩んだ末にその後千葉大5年、理研5年と10年間お世話になりましたが、恵まれた環境で思う存分好きな研究をさせて頂く事ができました。同一のT細胞抗原受容体が抗原の差異を感知して異なる応答を誘導する機構の作動原理に興味を持ち、いろいろなアプローチを試していた時期でした。もう少し単純なモデル系で普遍原理に迫れないかと思い、Fc $\gamma$ 鎖と会合する受容体にも対象を広げていたところ、ある仮説のもとに進めていた遺伝子発現比較で仮説に合う分子に引き当たりました。この分子、Mincle (Macrophage inducible C-type lectin) というレクチン分子 (1999年に審良先生らのグループが単離) は、最終的に目的としていた分子ではありませんでしたが、Fc $\gamma$ 鎖と会合する活性化受容体であることがわかりました。丁度その頃九州大学生体防御医学研究所(生医研)で研究室を持つ機会に恵まれ、横浜から福岡に移動することになりました。移動の直前に呼んで頂いた大阪大学 IREC のシンポジウムで発表したところ、結核菌の糖脂質との相互作用の可能性を質問してこられた先生がいました。木下タロウ先生の研究室におられた森田康裕博士でした。当時の生医研の所長は結核菌が専門の吉開泰信先生であり、菌体を供与頂いて調べたところ、Mincle は結核菌を認識する受容体であることが判明しました。リガンドを

精製・同定したところ、それは古くから山村雄一先生、東市郎先生が免疫賦活(アジュバント)活性を報告されておられたコードファクター (Trehalose dimycolate) でした。当時の生医研は非常に活かな組織で、ラボメンバーにも恵まれ、充実した研究生活でした。キャンパスは博多駅にも福岡空港にも街中にも近い便利な立地で、福岡の食も存分に堪能できた楽しい毎日でした。その後、Mincle はゲノム上で遺伝子重複を繰り返して類似する受容体クラスターを形成しており、それらの分子が軒並み、様々な結核菌糖脂質・糖鎖を認識する免疫受容体群であることを明らかにすることができました。また、病原体のみならず、自己糖鎖成分の変化も認識している

ことが判明しました。奇しくも学部時代の担任、栃倉辰六郎先生は微生物糖鎖が専門で、常に「糖鎖はDNAよりも奥深い」と繰り返して仰っていました。分子生物学全盛の時代に少し懐疑的に聞いていたその言葉の深さを実感し始めた頃でした。

その後、結核菌研究の縁もあり、大阪大学微生物病研究所・免疫学フロンティア研究センター (IREC) に研究室を持つことになりました。審良静男先生、坂口志文先生、長田重一先生などに廊下で普通に質問できるといふ申し分ない環境である反面、研究室を再度一から立ち上げるには予想以上に年月を要しました。ようやく数年前から研究室も動き



大阪箕面公園の野口英世像

だし、現在では素晴らしい研究室メンバーに恵まれて刺激的な毎日を過ごしています。

こうして今振り返ってみると、私の研究生はいつも教養と見識を備えた良い周囲の人に恵まれていたことに改めて気づきます。そして節目節目では必ず特別な人との出会いがありました。その意味では私の唯一の取り柄は「強運」であり、今後も、それを逃さず活かす謙虚で地道な努力と、時に大胆に挑戦する姿勢を継続していきたいと思えます。

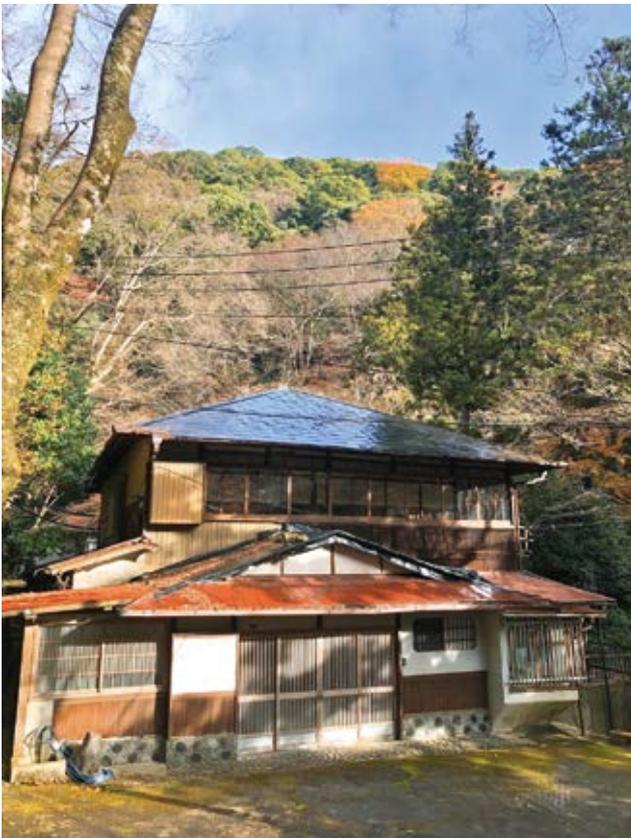
今回の受賞を機に、改めて野口英世博士の伝記を何冊か借りて読みました。有名な左手は、小学生の時に読んで想像していたよりずっと不自由であったことも初めて知りました。にも関わらず、5カ国語を身につけ、外国に渡り、当時の限られた設備と不自由な手で「実験」科学を志してこれだけの成果を成し遂げた経緯は想像を絶するものでした。さらに、あのパウロ・エールリヒの側鎖説に對抗する説を唱えていたことは初めて知る事実でした。同業者として、自分がやってきたこととの次元の違いに愕然とします。せめて今私がこれからできることは、当時より遙かに恵まれているであろう現在の研究環境を十分認識し、最大限に活かすべく、限られた時間を大切に残りの研究生生活に邁進することと、

受賞対象の成果を支えてくれた研究室員がこれからも研究を心から楽しめる環境作りに努めることであろうと決意を新たにしました。

伝記の中にも記述があった、野口英世博士が1915年に帰国した際、母シカをもてなしたという箕面の「琴乃家」とその対岸にある銅像にも先日行ってきました。灌道を歩きながら、小さい頃から自然に触れる機会を与え、自然と自然科学の道に導き、*with*でいることを背中で教えてくれた自分の両親にも、改めて感謝の意を伝えるに行こうと思えました。分野や経緯は全く違いますが、いつしか父の

得意分野であった「精製と同定」が現在の私の研究の中心になっていくことにも不思議な縁を感じます。

山を歩きながら、解けない問題をゆっくり考えるのも心地良いと思うようになり、曾祖父、祖父、父が科学と共に山を愛してきた理由も少し理解できたような気がします。これまで直接、間接的に私を支えて下さった人々から得たものを振り返り、感謝し、また、長くはない今後の研究生生活において新たな覚悟を決める機会を与えて頂いたという意味でも、改めて本賞の受賞に心より御礼申し上げます。



箕面公園の自然の中にたたずむ琴乃家

# 野口英世記念奨学生

野口英世記念奨学生制度は、有為な人材を育成し、良き社会人として世に送る目的で、高等学校に在学する間の学資金の給付を行う制度です。  
令和5年度の第65期奨学生は、奨学生選考委員会の推薦を受け、10名に決まりました。新しい奨学生が、それぞれのすばらしい夢を綴ってくれました。

## 「将来やりたいこと」

いわき市立好間中学校

おおさかき  
大榎

あさひ  
朝日



私が将来やりたいことは、化粧品の研究・開発です。今の世の中の外見や容姿が及ぼす影響は大きいです。また、そのせいで自分を卑下している人が多いと感じます。だから、少しでも自分に自身がついたり、自分を少しでも好きになったりして、堂々と行動できるような化粧品を作りたいと思います。それに、今では女性、男性に関わらず多くの世代の方が使うものでもあるので、様々な問題に直面しやすいと思います。だから、環境や人体に優しい化粧品の開発・研究、化粧品が自然環境や生物へ及ぼす影響の調査などをした

い  
です。

これらを実現するために、高校でしっかりと勉強し、大学へ進学できるように頑張りたいです。また、勉強することができると環境にいることに常に感謝し、これからの高校生活を過ごしていきたいです。

## 「高校生活への期待」

郡山市立安積中学校

かみやま  
神山

ひみ  
陽美



私の将来の夢は保育士になることです。子供が好きなのもありますが、人とのつながりがある仕事に就きたいと思っています。私は小学五年生のときからスポ少に入り、バドミントンを続

けていますが、コーチや他校の方々との関わりを持ち続けることで自分には無かった考えや経験が出来る。この夢を持ったきっかけになりました。その夢をかなえるために高校では、基本的な知識を身に付け、将来大学進学出来るようにしていきたいです。また、実用英語検定の取得も頑張りたいと思います。私の得意な英語の資格を取り、自分に自信をつけていきたいです。

高校では、自分を支えてくれた家族や先生方、友達などの周りの人に感謝しながら勉強と部活の両立をしっかりとし、自分の夢に近づけるような充実した生活を送りたいと思います。



## 「将来に向けて」

福島成蹊中学校

草野 美有  
くさの みゆう



この度は、奨学金により私の学習のご支援をいただきありがとうございます。

私は将来の夢が明確に決まっていなかったため、可能性を広げるために東京大学を目指しています。合格するためにはたくさんの努力が必要です。今は、検定や模試で結果を残し、努力の成果や学力の向上を実感できることをとても嬉しく感じています。

中学生の今は大学受験という目標が少し不明瞭ですが、日々今までより一層学習に励み、高校生になって大学受験を見据えたときに、東京大学という目標が手の届くものであり、学習を楽しんでいる自分でありたいと考えています。そして、大学生になって、自分が心から叶えたいと思った夢ができた時に実現できるように頑張っていきたいです。

## 「夢に近づくために」

福島市立吾妻中学校

佐藤 すみれ  
さとう すみれ



私には、得意な英語を活かすことができる、翻訳家になりたい、という夢があります。その夢を叶えるため、高校で勉強していく中で、より多くの知識を身に付けることを目標にしようと思います。

私はこれまで、教科書の内容を覚えるだけの学習をしてきました。しかし、高校では学習したことを覚えるだけでなく、自分の身の回りのことと結び付けて考えてみたり、疑問を持って進んで質問したりするなど、ただ内容を覚えるだけでは得ることができない知識や、物事を様々な視点から見る能力を身に付けていきたいです。

大学や自分の将来も見据えて何事にも一生懸命取り組み、高校を卒業する時に、夢に大きく近づいたと自信を持って言えるような、充実した生活を送れるよう、頑張ります。

## 「将来の夢と新しい自分」

福島市立福島第四中学校

澤村 果奈  
さわむら かな



私にはたくさんの人に笑顔と元気を与えられるような看護師になるという夢があります。看護師は点滴や患者さんの体調管理などを行い、健康面でサポートをしています。でも、それだけではなく、患者さんに寄り添って心のケアをすることで、病気やけがで入院している人の精神的な支えにもなるということに良さを感じ、看護師を目指すようになりました。

中学校卒業後は看護科のある高校に進学し、看護の専門的な知識を学んだり実習で看護師の仕事を経験したりして、看護師国家資格を得られるように全力を尽くしたいと思います。

また、高校では新しい部活動に挑戦しようと思っており、新しいクラスや部活動では、「笑顔」を大事にして活動したいです。看護師という夢に向かって一日一日を無駄にせず学習に励み、充実した高校生活にしたいです。

## 「高校生活で身につけたいこと」

福島市立蓬萊中学校

鳴原 佳乃子  
（なきはら かのこ）



医療を学びたい。それが私の目標です。そして叶えたい将来の夢でもあります。そのためには高い学力が必要です。厳しい勉強にも立ち向かって行かなければなりません。ですから、高校では予習や復習をきちんとい、中学校で培ってきたことを活かしてたくさん勉強したいです。

また、高校の生徒会活動や文化祭などの行事には積極的に参加したいです。私は中学校で生徒会の書記を務めていました。その活動で得た経験も活かしていきたいです。

高校生活では、恵まれた環境で勉強などができるといふことに感謝したいです。そして今回、私を奨学生として選んでくださりありがとうございます。大好きな母の負担が減ると思うととても嬉しいです。必ずこの恩を忘れずに活動し、将来に渡って、恩返しができるように頑張ります。

## 「夢の現実のために」

いわき市立江名中学校

高橋 優  
（たかはし ゆう）



この度は、野口英世記念奨学生に選考していただき、ありがとうございます。

私の将来の夢は、バイオ技術者になって新しいバイオエネルギーをつくりたいと考えています。なぜ、このような夢かというと、理科の中でも、遺伝の学習に興味があり、自分が好きで楽しいと思うことを仕事にして、地球温暖化を少しでも食い止めたいたいからです。

そのために私は、高校に進学したらバイオ技術に関する専門知識を学び、実習や実験を通して知識を高めていきたいと考えています。

高校を卒業したら、資格を取得し、夢の実現のために難しいことでも進んで挑戦し、新しいバイオエネルギーの開発を成功させたいと思います。夢の実現に向けて、小さなことをコツコツ積み上げていきます。

## 「学んだことを生かした今年の抱負」

福島市立信陵中学校

柳川 優里  
（やながわ ゆうり）



私の今年の抱負は、何事にも全力で取り組むことと、今よりも真剣に勉強に励むことです。

私は、「最初が肝心」という言葉を、中学校生活の中で学びました。それは、時間の猶予がなく、心に余裕がない中で何かに挑戦しても、良い結果を得られないという経験が多くあったからです。

高校生になれば、将来について具体的に考えなければならなりません。その中で、進路の実現のために必ず勉強が必要になります。

当然、高校生になれば勉強の内容は難しくなります。

だからこそ、私は、この二つの抱負を意識して高校生活を過ごしていくことで、進路の実現を目指し、同時に短い高校生活を充実させて楽しみたいです。

## 「高校生活の期待」

会津若松市立第一中学校

山岸 やまぎし  
陽亮 ようすけ



僕の兄弟は五人で、兄と姉、下に妹が二人です。兄は今大学生ですが、高校は県内で卒業し、姉は吹奏楽を続けたくて、県外の高校でがんばっています。同じようにやりたい事が具体的にはまだありませんが、高校へ入学したら、まずは勉強に力を入れたいです。そして将来の進みたい道を見つかけたいと思っています。

母がよく「人生って最後は人と人のつながりだと思えよ」と言っています。高校での新しい先生とも出会いだし、友達とも出会う事も大切にしていきたいと思っています。相手の気持ちも理解して、一生の友達が出来るのかなと思います。父も学生生活で一生の友達がたくさんいました。また部活動も頑張りたいです。中学校ではテニス部でした。とても楽しい部活で、三年間過ごしました。テニスも、もっと上手くなって、大会へ出られる様にチャレンジしたいと思っています。

## 「世界を駆ける人に」

猪苗代町立猪苗代中学校

渡部 わたなべ  
由愛 ゆあ



私の将来の夢は、世界の子供たちに日本のことを教え、世界を飛び回る人になる事です。

家の民宿にきた、私と同じ歳のオーストラリアの子と会話する機会がありました。お互いに理解できる言葉は少なかったものの日本のアニメがきっかけで会話を広げることができました。

英語で会話をするというのは新鮮で難しかったけれどとても良い経験になりました。元々、世界の文化や自然などに興味がありましたがこの日からより一層世界に興味をもつようになりました。

中学生になり英語を本格的に学ぶようになって、英語は知れば知るほど面白く、楽しく感じました。

海外で、日本だけでは味わえない価値観や文化などを学び、活躍できる人になりたいです。そのために高校でも英語を懸命に学び、国際学部の大卒へ進学したいと思っています。夢を叶えるために日々頑張っていきたいです。



# 第28回野口英世博士顕彰記念少年科学賞

野口英世博士生誕の地、猪苗代町の小中学校から作品を募集する野口英世博士顕彰記念少年科学賞は第28回を数えました。今回は小学校159点、中学校11点、計170点の研究作品の応募がありました。熱意をもって研究に取り組んだ作品が多く見られました。令和4年11月9日野口英世記念館至誠館において授賞式が執り行われました。

本年度の入賞作品は左記の通りです。おめでとうございます。

## 最優秀賞

よみがえれ猪苗代湖 水質日本一！  
1型糖尿病について パート2 ～生活の中での血糖値の変化を調べる～

猪苗代小学校 5年 杉原 蓮  
猪苗代中学校 2年 鈴木 理心

## 優秀賞

ささかわながれのいそだまりにいるいきものたち  
身近にあるセミのぬけがら

千里小学校 1年 森田 優人  
翁島小学校 1年 坂本 隆仁  
翁島小学校 3年 坂本 陸仁  
吾妻小学校 2年 伊東 隆遥

がいらいしゅの花をしらべる

長瀬小学校 4年 渡部 正和  
緑小学校 6年 佐藤 暖花

牛乳からプラスチックをつくらう

猪苗代中学校 1年 渡部 心結

猪苗代湖の漂着水草（ヒシ）で紙をつくらう

## 佳作

いねの花のかんさつ

翁島小学校 1年 加藤 悠花  
翁島小学校 2年 ライアン 剣史

なんで水がにごっているはまもあるのかしりたい

翁島小学校 3年 二瓶 千織  
千里小学校 4年 鈴木 創介

猪苗代湖をきれいにしたい

猪苗代小学校 4年 鈴木 莉久  
翁島小学校 5年 喜多見 七葉

トマト大変身のひみつ

長瀬小学校 5年 菅沼 慎  
猪苗代中学校 1年 小椋 琉央

まこと昆虫日記

酸川の水質調査



猪苗代中学校 2年 鈴木理心さん



猪苗代小学校 5年 杉原蓮さん

# 令和4年度「野口英世記念会賞」

福島県教育委員会が主催する中学生・高校生の優れた科学・技術研究論文を称える「野口英世賞」、国際理解に関する優秀な論文を称える「朝河貫一賞」の優秀作品に「野口英世記念会賞」を授与しています。

令和5年1月5日に行われた合同表彰式で当会倉根一郎理事長より表彰状や記念品が贈られました。

## 野口英世記念会賞

### ●野口英世賞 中学校 個人研究の部

最優秀賞 福島市立福島第二中学校 2年

菅野 幹人

「世界に一つだけのバラを咲かせよう」

〜バラ交配4年目、

理想の赤バラは誕生するのか〜

### ●朝河貫一賞 中学校の部

最優秀賞 会津若松市立第五中学校 3年

渡部 未来

「大きい世界の話を教室で」

### ●朝河貫一賞 高等学校の部

最優秀賞 福島県立会津学鳳高等学校 1年

中村 文彬

「異なる視座に立つこと的重要性〜国際社会を生きるために〜」



野口英世記念会賞受賞者のみなさん

## 令和4年度

### 野口英世記念

### 高等学校自然科学系

### 部活動助成事業

公益財団法人野口英世記念会では、野口英世が生涯をかけて世界の人々のために科学の研究に取り組んだことから、科学への興味関心を高め、未来を担う人材育成を図る目的として、部活動（研究活動）の充実のために、福島県の高校生の自然科学系部活動の助成事業を行なっています。高校生みなさんの活発な研究活動を期待いたします。

令和4年度の助成対象校は左記の通りです。

- 福島県立福島西高等学校 科学部
- 桜の聖母高等学校 理科部
- 福島県立葵高等学校 科学部
- 福島県立磐城桜が丘高等学校 科学部
- 福島県立原町高等学校 数科学部

# 野口英世博士顕彰記念事業

野口英世生誕の地である猪苗代町では、町内の小・中学校の児童生徒が「二十一世紀の国際社会において野口英世に続く日本人」になることを期待し、スポーツや文化事業を通じ、野口英世の精神である「忍耐・努力」を培うことを目的にした種々の顕彰記念事業を行っています。

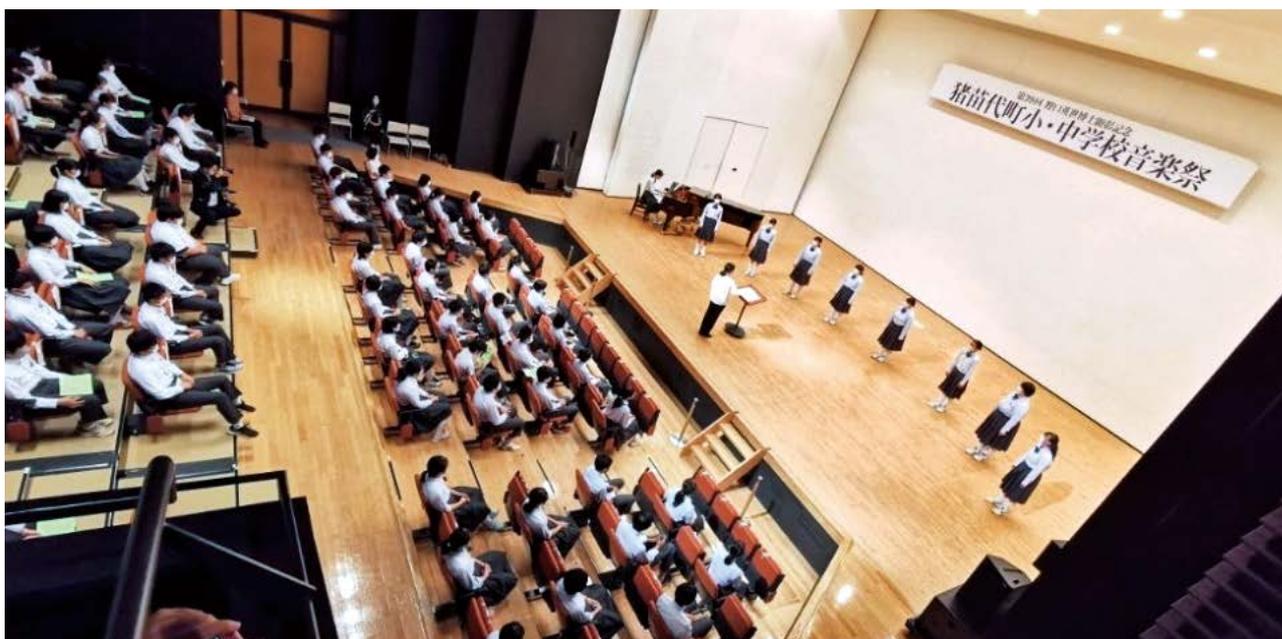
今年度は残念ながら中学校球技大会は実施できませんでしたが、それ以外の事業は新型コロナウイルス感染症の制限のある中、関係者の皆様のご尽力により無事に開催できました。事業に携わっていただいた全ての方々に感謝申し上げます。



小学校体育祭 2022年9月7日



小学校スキー大会 2023年2月9日



小中学校音楽祭 2022年9月29日

# 第61回野口英世博士顕彰記念作文コンクール

野口英世博士のふるさと猪苗代町の小学校4年生と中学校2年生を対象に募集を行う「野口英世博士顕彰記念作文コンクール」の授賞式が11月9日に行われました。

郷土の先輩でもある野口英世への想いや、野口英世の生き方から学んだことを書いた作品が多く寄せられました。授賞式では特選に選ばれた吾妻小学校4年畠山璃桜さんと猪苗代中学校2年鈴木理心さんが受賞作文を朗読しました。

## 特選

### 柱の文字と博士の決意

吾妻小学校 4年 畠山 璃桜



手に大やけどをしたこと。それがもて左手がくっついてしまったこと。そのために、友達にいじめられたこと。でも、その友達が協力してお金を集め、左手の指を切りはなす手じゅつをすることができたこと。手じゅつをしてもらった時に医者になろうと、思っ努力したこと。博士の伝記を読んで、すごい人なんだなと思いました。

けれども、私が博士について知っていたり、思ったりしていたことは、ほんの少しのことだったので。それが分かったのは、野口英世記念館を見学した時に見つけた柱の文字でした。

博士の生まれた家の床の間の柱に

「志を得ざれば再びこの地を踏まず。」とほってありました。先生が、

野口英世博士がえらい人だということは、何となく知っていました。小さい時にいろいろに落ちて、左

野口英世博士に関する作文	
〈小学校の部・4年生〉	
特選	柱の文字と博士の決意 吾妻小 畠山 璃桜
金賞	自分と未来を変えるために 長瀬小 高梨 紗那
銀賞	野口英世への決意表明 緑小 鈴木 咲翔
〈中学校の部・2年生〉	
特選	絶望の時こそ前を向く 猪苗代中 鈴木 理心
金賞	覚悟 猪苗代中 大桃 匠
銀賞	忍耐は苦し、されどその実は甘し 猪苗代中 白井 風雅

二度とここには帰ってこないという意味なんだよ。」と教えてくださいました。夢を持つということは、私にもできます。その夢は、キャリアパスポートに書きました。でも、博士は、医者になるという夢をどうしても実現するために、柱にきざんだのです。きざんだ文字は決して消えることはありません。決して消えない固い決意なのです。私は、博士がどれだけ医者になりたかったのか、そのすごさを感じました。そして、左手が不自由になったくやしさ、手じゅつによって助けられたうれしさも感じる事ができました。

柱の文字をきざんだ博士は、夜もねないで勉強しました。固い決意があったからできたのだと思います。医者のしかくを取ったら、その上に、いろいろな研究にはげむために、アメリカやガーナなどに長い間行きました。医者になったのだから、すぐ猪苗代に帰ってきたらいいのに、ずっと研究を続け、何十年も帰ってきませんでした。博士の夢は、ただ医者になることだけではなく、世界中の人を助けてあげることだったのです。

お母さんから「早く帰ってきてください」と何度も書いてある手紙が来て、博士は一度日本に帰ってきました。柱の文字の言葉が実現できたから帰れたのかもしれない。お母さんと会えて、良かったと思いました。

ガーナで黄熱病の研究をして、ざんねんなことに

ウイルスを見つけられず、自分もかかって亡くなってしまいました。でも、ガーナの人は、研究してくれてうれしかったと思います。世界の国の人達が、今でも感しゃしていると思います。

博士の志が、たくさんの研究者に伝わり、いろいろなウイルスや細きんの研究をしてくれたおかげで、今はワクチンができて安心な生活ができています。博士のきざんだ文字は、今も私たちを守ってくれているのです。

### 特選

#### 絶望の時こそ前を向く

猪苗代中学校 2年 鈴木 理心



心の平安を乱すばかりだ」

このような言葉を残した野口英世は、自分の人生に絶望することはあったのだろうか。

私達がよく知る通り、幼いころに左手に大火傷を負い、左手が不自由になってしまった英世。

「絶望の時こそ前を向く。」

そんな英世の強い精神を育てたものは何であったのだろうかと私は考えた。そう思ったのには自分に起きたあることがきっかけだった。

私は、小学六年生の冬にある病気にかかった。三歳のころからアルペンスキーをやっている私にとって、その時期はさまざまな大会に向け毎日練習を重ねている大切な時期だった。

急に体に異変を感じ病院へ行くと、医者に病名を告げられた。初めはどんな病気かも分からなかったが、一緒にいた母の様子で深刻な病気だということに理解できた。

冬休みの間はずっと病院のベッドの上で安静にしていなければならなかった。一番スキーの練習をしていなければならぬときに何もできないことに焦りを感じた。それよりもこの病気が一生治ることはなく、毎日自分で自分の体に針を刺さなければ命にかかわるということを知ったとき私は絶望した。頭が真っ白になった。

私はその日から、何をしても気分が晴れなかった。テレビを見ても、ずっと読みたかった漫画を読んで

も、何も面白く感じられなかった。

ある日の朝、いつものように検温をしに来た看護師さんが、「後で遊びに来るね。」と一言残してナーステーションへ戻った。正直私は来てほしくなかった。同情で気を遣われるのが嫌だという思いでいっぱいだった。

しかし、看護師さんと話をしながら一緒にカードゲームやボードゲームをするのは楽しく、不思議と病気のことを忘れることが出来た。その後も看護師さんと何度か遊ぶうちに徐々に元気が出てきたのが自分でも実感できた。

英世は周りの人たちに馬鹿にされるのと同じ時に、同情されることにも嫌気がさしたこともあったかもしれない。だけど、英世の残した言葉の一つにこんな言葉がある。

「家が貧しくても、体が不自由でも、決して失望してはいけない。人の人生の幸も災いも自分から作るもの。周りの人間も、周りの状況も、自分から作り出した影と知るべきである。」

私はこの英世の言葉ではっとした。自分は周りの人たちにとても恵まれていることに気づいた。落ち込んでいる自分を元気づけてくれた病院の方たち。病気のことを理解し気遣ってくれる友人たち。近くで見守ってくれる家族。

私の病気は医学の進歩により他の健康な人たちと同じように生活ができる。それなのに私は自分が絶

望のどん底にいと想像してしまっていたのだ。

英世は他人からの同情や侮辱ですらもプラスに変え、周りの人たちの協力を得て勉強し続けた。それほどまでにただ学びたいという意欲があったに違いない。それこそが英世の強さなのだと思つた。そして努力を重ね、世界的にも尊敬される医聖となった。

英世が亡くなったとき、その知らせは日本だけではなく世界中に知れ渡ったそうだ。自分の命よりも研究を優先させた英世。英世は他の誰かに勝つことが目的ではなく、世界に蔓延する病に打ち勝つことを目標としていたに違いない。そしてそのための努力を惜しまなかったからこそ、今でも世界中の人に尊敬されている。

英世は手の火傷のせいで家を継ぐことができなかった。しかし努力で自分の人生と未来を変えた。私もこの病気のせいでこれから諦めなければならぬことがあるかもしれない。だけど、自分の未来は努力でいくらでも変えることができる。将来の目標のためにも、誰かに勝とうとするのではなく、英世のように誰かのために努力することが出来る人間になりたいと思つている。



作文コンクール 入賞のみなさん

# 野口英世記念館の動向

## 企画展 描かれた野口英世

令和4年4月1日～令和5年3月31日

千円札の肖像でお馴染みの野口英世は、お札の肖像以外にもいろいろな場面で描かれています。その描き手は一流の芸術家やプロの漫画家、イラストレーターなどから野口英世に想いを寄せている小学生まで多くの人が描いています。

キャンバスに書かれた油彩画や水彩画、イラスト、伝記やマンガの図書、切り絵、おみやげのパッケージやグッズなどいろいろな場面で野口英世に出会うことができます。

令和4年度の企画展は、展示室全体どこを見ても描かれた野口英世を展示しました。

正面ガラスケースには美術展らしく堀市郎や佐藤照雄、大竹輝幸らの描いた重厚な油彩画を展示し、来館者の目を集めました。

一方側面には、顔の特徴をデフォルメ（誇張）してユーモア豊かに描くカリカチュアや、服の皺や頭髪、表情をモノトーンの印影で表現する切り絵、子どもたちが野口英世への大好きな気持ちをストーリーに表してくれたクレヨン画など、見ていて楽しめる

る作品を展示しました。



企画展「描かれた野口英世」

来場者は野口英世の伝記やマンガのコーナーでは、自分も子どもの頃に読んだ伝記やマンガに懐かしさを感じたり、描かれている野口英世の顔の印象の変化など、時代によって描かれ方が変わっていること

に興味深く見ている方が多くいました。

来場者が展示でとくに興味を示していたのが野口英世のグッズのコーナーです。おみやげのパッケージや民芸品、テレホンカードなど、身近なものに描かれた野口英世に親しみをもたれ、ミュージアムショップに販売の問い合わせなども多くありました。それぞれの作者の想いのこもった作品を来場者にご覧になられ、その作品から野口英世への親しみを感じていただける展示となりました。



野口英世が描かれたグッズの展示

## 青いハンカチ運動 屋上に展示

令和4年5月～10月

現在も収束の兆しが見えない新型コロナウイルス感染症に対して、長い間その治療や対応にあたられている医療機関や福祉施設などの従事者の方にむけて、昨年度より青いハンカチに感謝の気持ちを記して館内に展示いたしました。

春になり雪解けとともに収束の願いを天に届けるため、記念館の屋上に青いハンカチを掲げました。

小学生や地元の子どもたちが書いた感謝と願いが青空と磐梯山のもとにはためきました。

願いが通じ一日も早い収束が訪れることを願っています。



青空のもとにはためく青いハンカチ

## 第94回野口英世博士命日祭

令和4年5月21日

野口英世博士の命日にあたる5月21日に野口英世家前におきまして命日祭を執り行いました。

猪苗代町長、教育長をはじめ地域の代表者や当会役員により野口英世の冥福を祈りました。

当日は野口家の菩提寺である長照寺の楠恭信住職による読経の後、参列者が献花を捧げました。



命日祭の様子

## アパルウ駐日ガーナ共和国大使来館

令和4年5月30日

令和4年4月に駐日ガーナ共和国大使に着任されたジュネヴィーブ・エドゥナ・アパルウ (H.E. Mrs. Genevieve Edna Apaloo) 閣下が野口英世記念館に来館されました。



野口博士ロボットをご覧になるアパルウ閣下

記念館では倉根一郎理事長と八子弥寿男館長が出迎え、八子館長の案内で記念館を視察され、アパルウ閣下は館長の話に興味深く耳を傾けていました。アパルウ閣下からは、野口英世博士没後100年に向けて、ガーナ共和国と野口英世記念会で協力して祝うことができるよう協力していきたいという言葉を送りました。

記念会からは倉根理事長が大使の来館をたいへん光栄に思い、ガーナは野口博士終焉の地であり博士の名を冠する研究所もあるため、今後も親しく協力していきたいとの歓迎の言葉が述べられました。

## 緑の少年団花苗寄贈

令和4年6月17日



寄贈のため来館した緑の少年団のみなさん

猪苗代町立緑小学校の緑の少年団のみなさんが記念館を訪れ、花の苗を寄贈くださいました。緑の少年団を代表して橋本沙樹さんより、「緑の少年団で花の苗を育てました。今後大切育ててください。」とご挨拶をいただきました。今年の花苗はブルーサルビア、サルビア、マリーゴールドの3種類です。生家前の中庭で来館者の目を楽しませてくださいました。

## 救世観音祭礼

令和4年8月9日



御詠歌を詠じる三城潟御詠歌護持親睦会のみなさん

記念館の中庭に祀られる救世観音（一葉観音）の祭礼が8月9日に執り行われました。野口家の菩提寺長照寺楠恭信住職による読経のうち、三城潟御詠歌護持親睦会のみなさまにより中田観音の御詠歌と一葉観音の御詠歌を詠じていただきました。

## 生家の囲炉裏を修復

令和4年8月29日



囲炉裏の壁土を塗る佐藤氏

野口英世がやけどを負ってしまった囲炉裏は今でも生家に残されています。その周りも実際に火を炊くことが少ないため、周りの土壁が徐々に崩れる部分が出てきたため、生家の解体修復工事で来約40年ぶりに囲炉裏の修復を行いました。

### 一葉観音御詠歌

ははとこと ひとつみふねに さおさして  
よろずよまでも よをすくうらん

作業は猪苗代の左官職人佐藤久一氏に依頼し、炉の壁面や底部に均一に土壁を塗ってもらい、修理が完了しました。今後も野口英世の運命を変えた原点となる場所として来館者に見ていただきたいと思えます。

## 第146回野口英世博士誕生祭

令和4年11月9日

本年の誕生祭は新型コロナウイルス感染症流行を受け規模を縮小して執り行われました。

野口家菩提寺・長照寺楠恭信住職による読経ののち、献花が行われ野口英世の誕生を祝いました。



楠恭信住職による読経

## 野口英世の後輩たちが 年中行事を体験

令和5年1月11日 団子さし

2月3日 節分豆まき

野口英世の後輩である翁島小学校の1年生と3年生が野口英世の生家で年中行事を体験しました。新型コロナウイルス感染症の影響で昨年は中止となったため2年ぶりの実施となりました。

生家には児童たちのたのしい声が広がり、団子さしではそれぞれが願いを込めてみずきにだんごや縁

起物を飾り、とてもきれいに彩られました。

節分豆まきでは鬼が登場すると「おには外、福はうち」と元気な掛け声で鬼を退治していました。

年中行事を経験することで地域の文化や伝統に親しんでもらいました。



元気に鬼退治



団子さし

## さとうきび親善大使来館

令和5年2月8日

沖縄県と福島県の両県で行なう親善大使の交流事業で沖縄県宜野湾市立普天間第二小学校6年生の桃原叶さんと中村隆一朗さんのふたりがさとうきび親善大使として野口英世記念館を訪問しました。

ふたりは長旅の疲れも見せず猪苗代小学校の児童と元気に交流し、記念館では学芸員の解説に耳を傾け、野口英世の生涯を興味深く観覧していました。



研究スタッフになりきるさとうきび親善大使

# 各地で行われたイベント

## 「MONEY 紙幣に登場する

### 偉人と科学」展開催

#### 越谷市科学技術体験センター

令和4年3月15日～6月5日



野口英世のコーナー

2024年  
度に紙幣が改札されることに伴い、千円紙幣の肖像として採用された野口英世、夏目漱石、北里柴三郎を紹介する企画展が埼玉県越谷市科学技術体験センターで開催され、当会からも資料などを提供し展示に協力いたしました。  
会場では3人の生涯とともにお金の製造や偽造防止の工夫なども紹介され、楽しく学べる企画展となりました。

## 猪苗代の玄関口で野口英世をPR

### 道の駅猪苗代

令和4年5月1日～6月19日  
令和5年2月1日～3月21日



道の駅猪苗代でのPR展示

猪苗代の人気観光スポットである道の駅猪苗代で今年も野口英世記念館PR展示を開催いたしました。(一社)猪苗代観光協会と道の駅猪苗代のご協力により、野口英世や母シカの肖像パネルや年表を展示いたしました。  
猪苗代湖や磐梯高原の観光の拠点である道の駅猪苗代には、多くの観光客が訪れるため、当館のミュージアムグッズなども出張販売し、多くの方に野口英世を目にしていただげる場となっています。

## いなわしろフェスティバルで

### 野口だるまの絵付け

#### 国立磐梯青少年交流の家

令和4年6月5日

磐梯山麓にある国立磐梯青少年交流の家で毎年開催される体験活動イベント「いなわしろフェスティバル」に野口英世だるまの絵付け体験のブースを出展いたしました。

体長9cmの野口英世だるまは、郷土民芸としても知られる白河だるまの工房に特注で制作していただいたものです。

顔や衣服の部分にペンやマジックで自由に絵付けをしてもらい、世界で一つのかわいい野口英世だるまを作ってもらいました。

ご家族連れでは子どもはもちろん、お父さん・お母さんも熱心に絵付けをしてくださいました。



絵付け体験でかわいいダルマが完成

# 第21回心の手紙コンテスト「母から子への手紙」

あなたに伝えたい思いがある



お手紙を朗読する平田みさ子さん

令和4年12月4日(日)第21回心の手紙コンテスト「母から子への手紙」の表彰式が猪苗代町体験交流館「学びいな」において行われました。今年には1367編の想いのつ

まったお手紙が全国のお母さんたちから寄せられ、大賞、準大賞、日本郵便賞各1編、優秀賞7編、佳作40編の計50編の入賞作品が選ばれました。

表彰式には、全国から入賞者の方が出席され、大賞を受賞した平田みさ子さんにより手紙の朗読が行われました。記念館でも大賞など10編のお手紙をご覧ください。

## 大賞 平田みさ子さん(大阪府)

あなたが生後五、六ヶ月の頃、夕方になると、急に泣いて、抱いても泣きやまない事があった事を思い出します。あやしても泣き止んでくれません。団地の五階に住んでいたのが階段を降りて下まで行きました。あなたの声が響きます。泣き止んで欲しいという気持ちで一杯でした。私も泣きたくなりました。

でも、あなたの泣き声は、決して疲れるだけではありませんでした。団地の一階の方が扉を開けて声を掛けて下さり、子育ての悩み等、話しをするようになりました。あなたをベビーカーに乗せて、夕方の散歩に行く事もありました。パン屋に入った時、従業員の方が、あなたに動物型のパンをプレゼントして下さいました。心が温まるパ

ンでした。  
「夕方泣き」から二十年以上が過ぎ、あなたは、歌う事が好きな子に成長しました。今から考えると、夕方泣いていたのは、歌っていたのかもしれない。あなたが産まれてきて体験出来た事を、大切に感じています。



一次選考を行う猪苗代町のお母さん方



最終選考会



大賞 平田みさ子さん



表彰式の様子

## 準大賞 吉田義子さん（北海道）

昌浩へ はじめて手紙を書きます。

今年も八月五日がきました。毎年一歳を加えて五三年がたちました。

昌浩の手術の朝は雲ひとつない六月の青い空でした。必死につないできた望みの糸がぶつりと切れてしまいました。それから六月の空は哀しみの色となってしまいました。

昌浩は小さな体で病苦に耐え、この手術を越えたら元気になるかと信じていましたよネ。健気な昌浩をおもう時、ただ「ごめんなさいネ」と呪文のように思い続けてきました。

五七歳になった姿を想像しても突然の別れとなった三歳十ヶ月の元気な姿です。

夢をみました。小さな昌浩が大きくなるほうきで笑顔いっぱいでお掃除をしていました。

母は八四歳になりました。日本海の見える田舎に住んでいます。夕景は美しいです。山の彼方に消える落日は神々しいです。残照の赤い一筋の海路をたどると昌浩に会えるとも思っています。昌浩会いたいです。母。

## 日本郵便賞 門田通子さん（愛媛県）

直ちゃんへ 施設でお世話になって私に、必需品を届けてくれる。ちよつとつまむお菓子や飲みものが欲しくて電話すると持ってきてくれる。助かっています。いつも有難う。時折、家に咲いた季節の花や旬の果物をカットして一緒に届けてくれるサプライズも嬉しいです。留守宅が気になるけれど、庭の草引きしたり、お墓やお佛壇の手入れも、近所のおつき合ひも忘れず気をつけてくれるので安心しています。家の周りの四季折々の変化を伝えてくれると目の前に様子が浮かび、庭に居る夢をみることも……コロナ禍で会えない日々が続いているし、施設で気軽におしゃべりすることも少いけれど、毎晩ケイタイで一日の出来事を話し、声を聞いて床につくのがとても嬉しいです。娘のない友達に、いいねとうらやましがらわれています。入退院もあつたけれど、今、元気でいられることに感謝です。身体にも往復一時間の運転にも気をつけて、今後共よろしくお願ひしますね。感謝!!

# 母から子への手紙

## 〜思いを伝える機会をいただいて

第20回 母から子への手紙コンテスト 大賞受賞者 中村 裕子

子供たちにずっと謝りたいことがありました。小さい頃、あまりかまってあげられなかったこと、「早く早く」と毎日せかしてばかりいたこと…。

夕方に仕事を終えると、急いで保育園までお迎え。家に着いたら、とりあえずゆでたニンジンを食べさせながら、夕食の支度。それが済んだらお風呂。毎日、目が回るほどの忙しさでした。

お布団の中から「ママ、読んで!」と言われるのが怖くて「お願い。早く眠って…」とばかり思っていました。あの時間がかけがえないものだとは、気づかなかったのです。

だから「読み聞かせをもらった子は心が豊か」という言葉はずっと私の心に引っかかっていました。

令和三年十一月五日夕方。帰宅すると、留守番電話にメッセージがありました。

「おめでとーございます。あなたの作品が大賞に選ばれました」。

猪苗代町の「母から子への手紙コンテスト 絆づくり委員会」からでした。

「お母さん、大将になった…」。震える指で娘たちにメールを送ると、すぐに「お母さん、天下取ったん? (笑)」と返信。あ、字を間違えている…。

もう晩御飯の支度どころではありません。スマホで検索すると、早くも福島テレビのニュース番組がアップされており、玄侑宗久先生が、「読み聞かせをしたいけれど、なかなか忙しくて…。というお母さん方に希望を与える内容ではないでしょうか」と、おっ



第20回大賞受賞 中村裕子さん



しゃっていました。私の書いたものが誰かの希望になるなんて……。「絶対に表彰式に行きたい」。そう思いました。

ひと月後の十二月四日夕方、電車を乗り継ぎ猪苗代駅に到着。駅前に雪が積もっていて、娘たちと三人、つい大はしやぎしてしまいました。（香川県は雨も少ないですが、雪もめったに降らないのです）。

翌日の表彰式はとても緊張しましたが、丁寧な講評をいただき身に余る思いでした。

玄侑宗久先生には、「改行が生きている。改行によって場面が一瞬で切り替わる」と言っていたとき、自分でも気がつかなかったことを教えていただきました。

大石邦子先生には「子供はたくましいですね。大人がかまってやれなくても、しっかりと自分たちで遊びを見つけて育っていくんですもの」と言っていたときホツとしました。

末利光先生の講評からはこのコンクールをとても大切にされていることが伝わってきました。

表彰式の後、野口英世記念館まで車で送っていただきました。展示されているシカさんの手紙を見たとき「ああ、教科書に載っていたのと同じだ」と感慨深いものがありました。小学生の頃、シカさんの手紙を初めて読んだ時は、泣きたいような、恐ろしいような、不思議な気持ちになったことを思い出しました。

あれは母が息子を思う気持ちが強く胸に迫り、幼い私には受け止めきれなかったからでしょうか。

誇らしそうな野口英世博士と緊張しているように見えるシカさん。手が届かないほど偉くなった息子を日本で待つシカさんは、どんな気持ちだったのでしょうか。

今回、長女が郵便局で見つけてきた応募用紙を「お母さん、こんなのがあった」と言っていたテーブルに置いたのは、何か私からのメッセージが欲しかったのかもしれない。

そのおかげで、長い間胸に秘めていた思いを娘たちに伝えることができました。さらに多くの方に共感していただき、励まされていたことは何よりのことだと思っています。

子育てに正解はないと言います。無我夢中でした。あれも、これも、してやればよかったと思うことばかりです。

でも、私のメールの打ち間違いに「字、間違えているよ」ではなく、「お母さん、天下取ったん？」と返してくれる娘たちに育ったことを、少し嬉しく思っています。

選考委員の先生方、猪苗代町の皆さまとお世話になりました。一次選考で手に取っていただいた猪苗代町のお母さん方、ありがとうございますございました。この温かくて素晴らしいコンクールがずっと続きますことを、香川の地から願っています。

この度はありがとうございました。



# 野口英世生誕150年に向けて 記念会のアウトリーチ活動

2026年は野口英世が誕生して150年の節目の年に当たります。この記念すべき年に向けて、野口英世記念会ではより多くの方にあためて野口英世を知ってもらおう活動として各地を巡回する巡回展を企画いたしました。

令和4年度は愛媛県四国中央市と北海道北見市で巡回展を開催いたしました。

## 野口英世巡回展

野口英世巡回展は野口英世記念館から遠方の地でパネルを中心とした展示や講演会を行うことであらためて野口英世を知っていただく企画です。

各自自治体教育委員会には会場の確保や展示準備、広報等で協力をいただきました。

令和4年4月8日（金）～17日（日）まで、愛媛県四国中央市暁雨館におきまして巡回展を開催しました。期間中約200名の市民の方が来場くださいました。

あわせて、4月10日（日）には同会場で講演会「野口英世―人類のために―」（講師・当会学芸員）を開催し約50名の市民に聴講いただきました。

四国中央市での巡回展は令和3年10月に実施予定



暁雨館の展示の様子

でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により中止となりましたが、四国中央市教育委員会の取り計らいにより改めて会場の準備をいただき開催の運びとなりました。



四国中央市立関川小学校の  
備前焼の野口英世像



多くの市民が集まった講演会

来場者からは千円札の肖像からの引退を惜しむ声や、あらためて野口英世の生涯を知ることができた喜びなどの感想がありました。また、四国中央市の四国中央市立関川小学校に野口博士の像があることなどもお知らせいただきました。学校中庭に設置されていた野口英世立像は、備前焼で作られた大変めずらしい像でした。

令和4年11月17日（木）～29日（火）には、北海道北見市北網圏北見文化センターにおきまして野口英世巡回展を開催し。会期中の11月19日（土）には同会場で講演会を開催いたしました。

北見市は野口英世の弟遠藤清三が長く暮らした土地で、一時期父・佐代助も滞在していたゆかりの土地です。

会期中約850名の市民の方が来場くださり野口英世の生涯とともに、この地ですごした清三と佐代助の北見での様子などを興味深く観覧していました。来場者からは、「佐代助さんや清三さんが北見の



北網圏北見文化センターでの巡回展の様子

地ですごしていたことはほとんどの人が知らないと思う。そのようなゆかりを知って、もっと野口英世さんに興味をもった。」と話されました。



遠藤家家族写真  
後列左から2人目佐代助、右端清三

巡回展に先立ち遠藤清三のご子孫の方にお話を伺う機会をいただきました。

当時清三は、北海道にわたり、北海道の地で同じ会津出身の遠藤家に養子に入り、遠藤家の長女・サイと結婚しました。北海道では主に商店の番頭や結婚後は鉄道の事務係の仕事をし、野付牛町（現北見市）に居住していました。

提供いただいた戸籍と当時の地図を照合すると、野付牛町（現北見市）の鉄道官舎に住んでいたことがわかりました。現在の北見駅から南西にわずかなところで、その跡地に現在では北見市役所の庁舎が

建てられています。

1915年野口英世が帰国した際は、父・佐代助は猪苗代にもどり、再会を果たしましたが、清三は都合により猪苗代に戻ることができませんでした。子どもの頃より面倒を見ていた弟・清三に会えないことを英世もたいへん悲しみました。

1928年に英世がアフリカで逝去したことを、新聞などの取材で知った清三は、すぐに事の次第を小林栄先生に尋ねるはがきを出し、猪苗代で行われた葬儀には、清三も駆け付けました。



遠藤清三家族が住んでいた鉄道官舎跡  
現在は北見市役所の庁舎が建てられている

今後も年に数か所でのような巡回展を開催し多くの方に野口英世を知っていただける機会を作っていきたいと思います。

# 出前授業に行きます！

## 出前授業の成果 ～「野口英世の生涯と業績」～

野口英世記念館では、修学旅行で野口英世記念館の見学を予定している小・中学校へ、あるいは野口英世の生涯と業績を教育活動に生かしていこうとする学校へ出向いて、わかりやすくお話する出前授業を行っています。

令和4年度は、これまでで最高の198校の皆さんに出前授業を行いました。いずれの学校でも、児童・生徒の皆さんが熱心に話を聞いてくださいました。たくさんいただいたお礼の手紙の中から8通をご紹介します。

宮城県仙台市立木町通小学校 6年

目黒 瑞穂さん



野口英世の素晴らしさを、私は特に三つ感じました。

一つ目は、左手の事をからかわれた時に「いつか医師になってみせる」と、勉強を頑張ったところです。いじめられて落ち込み、何もできなくなるのではなく、学問にはげみ成績上位だったというのはとても素晴らしいと思います。

二つ目は、自分が作ったワクチンがアフリカで効かなかった時、実際にそこへ行って研究をしたのは素晴らしいと思いました。自分のワクチンに責任をもって夜中まで研究を続ける姿に「そんなこと私た

先日は、野口英世についていろいろな事を教えていただきありがとうございました。

ちに行けるかな」「簡単にまねできない」と感じました。

三つめは、野口英世が最後に「私にはわからない」と言いました。死ぬ直前まで研究をして、人生を医学にささげたこの言葉は、野口英世らしい重い言葉だと思います。

修学旅行でも、この学びを生かしていきます。ありがとうございました。



宮城県仙台市立燕沢小学校 6年

菊地 遥さん



先日は、一時間のために福島県から燕沢小学校まで来ていただき、ありがとうございました。

おかげで、たくさんの方に興味をもつことができました。私は、野口英世についてよくわからない点もあったので、お話を聞いて色々な事がわかりました。

約百五十年前に福島県で生まれ、すごく貧乏で、いろりで左手をやけどしたことなど初めて知りました。図書室に本があったら絶対に借ります。名前が最初は違うのも初耳でした。足のサイズは同じくらいです。

野口英世が黄熱病だと思った病原体がウイルス病と知ってちょっと悲しいです。最後は黄熱病にかかって、ワクチンが違ったからそのまま五十才代で亡くなったのは、すごくすごくやさしいです。がんばって努力をした人がそんなに早く亡くなってしまふの

はくやさしいです。

野口英世のおかげで、自分も努力すればいろんなことができる実感しました。そして、お墓にある「その努力を科学にささげつくして 人類のために生き 人類のために死す」という文がとても心にひびきました。

修学旅行の二日目、お世話になります。立派な六年生として、野口英世記念館を見学してめいっばい楽しみたいです。

宮城県東松島市立鳴瀬桜華小学校 6年

太田 実伶さん



先日は、野口英世についてくわしく教えて頂き、本当にありがとうございました。

野口英世が出会いによって人生が変わったことや様々な研究をしたこと、たくさん努力したことなど、野口英世がどれくらいすばらしい人だったのかがよ

く分かりました。

また、野口英世の人生や努力する姿勢は、自分どのように生きたいのか考えさせてくれるようでもありました。

今回教えて頂いたことや、野口英世記念館で学んで感じたこと、考えたことなどをこれからの学校生活に生かしたいと思います。

本当にありがとうございました。

宮城県山元町立山下第二小学校 6年

中澤 安海さん



私たちのために出前授業をしてくれてありがとうございました。

お話を聞いて、野口英世は強くて立派な人だと思いました。1才半の時に囲炉裏に落ちて左手に大やけどをしたことから小学校でいじめを受け、いろいろな人に助けってもらいながらも成績優秀で、最後は



小学校よりいただいたお礼の色紙  
(富谷市立富ヶ丘小学校)

黄熱病などに立ち向かってワクチンを作り、たくさんの人を救った強い人だと思いました。

私が立派な人だと思った理由は、たくさんのお恩人たちに心配をかけながらも、その感謝を忘れずに科学に生涯をささげたことです。お世話になった人への恩返しをしたことは人としてとても立派だと思います。そして、すごい業績を残しながら人類のために生き、人類のために亡くなりました。

私も野口英世のように強く立派な大人になって、親に心配をかけたこともあったので恩返しがしたいです。

今日は、私たちのために授業をしてくださり本当にありがとうございました。

修学旅行がもっと楽しみになりました。

宮城県気仙沼市立松岩小学校 6年

菅原 悠可さん



本日はお忙しい中、遠いところから来てくださりありがとうございました。

野口英世のことは分かっていたのですが、さらにくわしく、ていねいに教えてもらいました。

今回のお話を聞き、努力は必ず報われることと、思いやりから生まれた、世界へ向かう長い道のりを実感できました。

誰かのために命をささげることは、そんなに簡単な事ではありませんが、子どものころから医学の道へ進むことを決め、伝染病の研究に打ち込んだ野口英世にすごく感動しました。

母シカの死という悲しいニュースがあっても、研究を続け、一人でも多くの命を救った野口英世は、東北の誇り、そして日本の誇りです。このことは、私にとっても誇らしいことだと思いました。

修学旅行が、より待ち遠しくなってきました。

新潟県新潟市立江南小学校 6年

大原 あおさん



先日は、野口英世について教えてくださりありがとうございました。

私の祖父が、野口英世のことが好きで三回ほど記念館へ連れて行ってくれました。伝記の本も買ってくれて、その伝記を十回ぐらい読んでいたので、出前授業で話されることは全部本に書いてあるのだろうと思っていました。本に書いてないこともあってびっくりしました。

私が行ったことがあるデンマークに留学していたなんて初めて聞きました。野口英世はお金の管理が甘く、すぐにお金を使ってしまうことは知っていたのですが、妻のメリーがお金の管理をしていたことも、本に書いていない事なのでびっくりしました。

野口英世のお墓がアメリカにあるから、せめて自分の生まれたところにあつて欲しいと少し思いました。

修学旅行で記念館へ行くときは、野口英世の歴史をしっかりと見たいです。

新潟県新潟市立両川小学校 6年

藤田 愛椛さん



今回は、私たちのために、出前授業をしていただきありがとうございます。

私は、野口英世の話を聞いて興味を持ったのが、野口英世を支えた人々です。特に、血闘守之助さんは、野口英世の医学者としての才能を見出し、経済的な支援も惜しまなかったという話はとてもかっこいいと思いました。野口英世が正直だったからということもあるのかなと思いました。

私は、緊張しただけで正直に話せなかったりするので、野口英世は特別だと思いました。野口英世のように人とちゃんと話して支えてもらえるような、信じてもらえるような人になりたいと今回の授業で

思いました。

野口英世のことをもっと知りたいので、記念館へ行くことが楽しみです。

本当にありがとうございました。

埼玉県蓮田市立黒浜北小学校 6年

志賀 蒼也さん



先日は、野口英世の出前授業をしていただきありがとうございます。

ぼくは、野口英世が子供のころにたくさんつらいことがあったのに、毎日勉強をして、病気で困っている人を助けるために医学に生涯をかけたことにおどろきました。

野口英世は貧しい家に生まれ、お金がなく左手に大やけどまでしたのに、たくさんの人に支えられて、伝染病の研究を毎日三時間のすい眠でがんばったことをすごいと思いました。

黄熱病のワクチンが効かなかったアフリカに、「危険だから行くな」と言われたのに、毎日夜中まで研究をしたことに興味を持ちました。

ぼくも野口英世を見習いたいと思います。

## おわりに

出前授業では、様々な特色を持った学校との出会いがあります。

例えば、野口英世の出前授業が一過性のもとならないよう教育活動に取り入れて「一人から学びなりたい自分へ」というテーマで実践している学校がありました。

『地域の方、学校の行事に携わってください』  
た方、修学旅行で出会った人々、親など。多くの人々との出会いや関わりの中で、自身を見つめ直し、今の自分と未来について考えていく』というものです。

本会の出前授業を通して、子どもたちの心の奥底から湧き上がる感動や出会いが豊かな学びとなり、立派な大人への原動力となるよう願っています。



## 令和4年度の受け入れ資料

○ウッドローン墓地関連資料

(東京都 佐藤幸子氏)

○旧野口英世記念会館関連論文

(東京都 鈴木恵美子氏)

○野口英世肖像写真・本田雄五郎自傳

(茨城県・木村達雄氏)

大正6年、チフス回復を記念して堀市郎が撮影した肖像写真。寄贈者の祖父・本田雄五郎は当時、古河虎之助(古河財閥第3代当主・男爵)の依頼で医学視察とともに野口英世の帰国を促すため渡米し、野口と交流をもちました。

この交流について『本田雄五郎自傳』に「第10章 亜米利加行、野口英世との邂逅」として、当時の様子が詳しく書かれています。

○野口英世20世紀デザイン切手カバー

(福島県・星 ナツ氏)

○姉・野口イヌ写真

(宮城県・星野信明氏)

○野口英世肖像写真

(山口県・篠田稔彦氏)

○エクアドル国野口英世記念切手アルバム

(東京都・島村美奈子氏)

寄贈者の祖父が通信事業関連の仕事でエクアドルを訪れた際に購入されたものと思われま。野口英世生誕100年を記念して発行された記念切手で、1976年11月8日発行日の初日カバーやスタンプが押印されています。



○感染症関連書籍

(東京都・竹田美文氏)

○エクアドル国野口英世記念切手

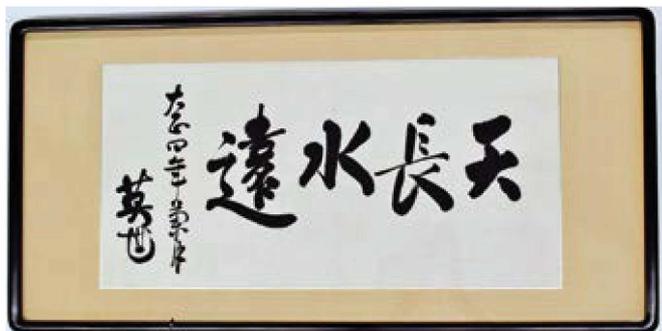
(栃木県・山崎佳寿子氏)

○野口英世詩文

(東京都・神長善次氏)

○野口英世イラスト絵はがき(福島県・水野貴裕氏)

○野口英世揮毫「天長水遠」(茨城県・広瀬伶子氏)  
野口英世が大正4年に帰国した際に揮毫し、弟・遠藤清三に贈った直筆の書。(関連43頁)



○地図「大日本職業別明細図野付牛町」(コピー)

(北海道・北見市教育委員会)

○書籍『志賀潔とささえた家族』

(神奈川県・志賀直史氏)

本年も多くの方より資料の寄贈、情報提供をいただきました。この場を借りましてお礼を申し上げます。

野口英世に関する資料や情報などございましたら、ご一報いただきたくお願いいたします。



企画展にて展示した寄贈資料

令和4年度 主な行事

令和4年	令和5年
4月1日～令和5年3月31日	9月29日
企画展「描かれた野口英世」	野口英世博士顕彰記念小中学校音楽祭 於学びいな
4月8日～17日	10月3日
愛媛県四国中央市 野口英世巡回展	野口英世博士顕彰記念少年科学賞審査会 於至誠館
於暁雨館	10月7日
4月	11月9日
感染症ミュージアム工事着工	応急手当推進事業所認定証交付
5月1日～6月19日	11月9日
道の駅猪苗代PRパネル展	第146回野口英世博士誕生祭
5月19日	11月9日
監事監査	第28回野口英世博士顕彰記念少年科学賞授賞式
5月20日	11月17日～29日
第1回資金運用委員会（書面決議）	第61回野口英世博士顕彰記念作文コンクール授賞式
5月21日	12月1日～令和5年3月15日
第94回野口英世博士命日祭	於北網圏北見文化センター
5月23・24日	12月1日
普通救命講習会 於猪苗代消防署	感染症ミュージアム 冬季休館
5月30日	12月3日
駐日ガーナ共和国大使 来館	奨学生選考委員会
6月1日	12月4日
猪苗代町より花苗寄贈	第21回母から子への手紙コンテスト表彰式
6月4日	12月29日～1月3日
第1回理事会（オンライン）	於学びいな
6月5日	令和5年
猪苗代フェスティバル	1月11日
於国立磐梯青少年交流の家	団子さし
6月17日	2月1日～3月21日
緑小学校緑の少年団花プランター寄贈	道の駅猪苗代PRパネル展
6月18日	2月3日
自然系高校部活動助成金選考会	節分豆まき
6月19日	2月8日
第1回評議員会	さとつぎび親善大使 来館
7月1日	2月9日
野口英世記念感染症ミュージアム	野口英世博士顕彰記念小学校スキー大会
オープン式典。内覧会	於猪苗代スキー場
7月2日	2月3日
野口英世記念感染症ミュージアム 一般公開	第2回資金運用委員会
7月2日	3月4日
野口英世記念医学賞選考委員会	第2回理事会（オンライン）
救世観音祭礼	3月17日
8月9日	3月19日
感染症ミュージアム来場者1万人達成	第4回野口英世アフリカ賞受賞者来館
8月26日	
生家囲炉裏修理	第2回評議員会
8月29日	
野口英世博士顕彰記念小学校体育祭	
9月7日	
於猪苗代町運動公園	

令和5年	4月1日～令和5年3月17日	企画展「黄熱病原体をもとめて 中南米への遠征 ～野口英世ブラジル遠征100年～」
4月		令和5年度奨学生証贈呈式
5月	5月21日	第95回野口英世博士命日祭
5月		野口英世博士顕彰記念中学校球技大会
6月		第1回理事会
6月		第1回評議員会
8月	8月9日	救世観音祭礼
9月		野口英世博士顕彰記念小学校体育祭
9月		野口英世博士顕彰記念小中学校音楽祭
11月	11月9日	第147回野口英世博士誕生祭
11月	11月9日	第29回野口英世博士顕彰記念少年科学賞授賞式
11月	11月9日	第62回野口英世博士顕彰記念作文コンクール授賞式
11月	11月9日	第66回野口英世記念医学賞授賞式
12月		第22回母から子への手紙コンテスト表彰式
令和6年	1月	団子さし
2月		節分豆まき
2月		野口英世博士顕彰記念小学校スキー大会
3月		第2回理事会
3月		第2回評議員会

# 出前授業に行きます！

## 科学者 野口英世の魅力をお話します。

野口英世記念会の職員が修学旅行・遠足などで来館される小・中学校に出かけて、野口英世の生涯と研究業績を、スライドを使ってわかりやすくお話します。経費はすべて当会が負担します。

出前授業のお申込みは、ホームページの「出前授業申込書」をダウンロードして、必要事項を記入のうえFax(0242-23-7122)してください。

# ご寄付の お願い



皆様におかれましては、日頃より公益財団法人野口英世記念会の事業にご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

野口英世記念会は、設立以来、野口英世の偉業を記念しこれを後世に伝えるべく今日まで活動してまいりました。また、野口英世記念医学賞の授与、野口英世記念奨学金の貸与・給付、そして学校や地域の社会教育・文化活動への様々な支援を行ってまいりました。

平成27年には野口英世記念館をリニューアルし、令和4年7月に日本初の感染症に特化した博物館として野口英世記念感染症ミュージアムを新たに開館いたしました。多くのお客様に、野口英世の偉業と感染症について理解を深める一助としていただきたいと存じます。

当記念会は、野口英世の生涯と業績をより多くの人々に知って頂くだけでなく、今後なお一層の社会貢献を進めてまいる所存であります。

つきましては、皆様には当記念会の活動に重ねてご理解をいただき、なお一層の活動充実のため、ご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人野口英世記念会

## 寄付の申込方法

- 「寄付申込書」に必要事項をご記入いただき、事務局まで郵便、FAXまたはE-mailでお送り下さい。お申し込みは随時受付です。
- お申し込みをいただきましたら、野口英世記念会から郵便振込用紙をお送りします。振込手数料は野口英世記念会が負担します。
- 寄付金の額は、一口3,000円からお願いします。
- ご寄付を頂いた方は寄付者銘板に芳名を掲載します。掲載を希望されない方はお申しつけ下さい。

- ご寄付頂いた寄付金は税法上の優遇措置として税額控除または所得控除の対象となります。住民税についても、都道府県又は市区町村の条例指定により税額控除の対象となる場合があります。詳しくは、お住いの都道府県・市区町村にご確認ください。(当団体に対する寄付金は、福島県の条例指定対象寄付金です。)
- ご寄付の特典  
3,000円以上の方:招待券1枚  
6,000円以上の方:招待券2枚  
15,000円以上の方:野口英世関連商品[2,000円相当]、招待券2枚  
30,000円以上の方:野口英世関連商品[5,000円相当]、招待券2枚  
60,000円以上の方:野口英世関連商品[10,000円相当]、招待券4枚

## 寄 付 申 込 書

# 寄付金額 金 円

ふりがな	
氏 名	印
住 所	〒
電話番号	
E-mail	@

◎ ご記入いただきました寄付申込書は、下記事務局まで郵便、FAXまたはE-mailでお送り下さい。

事務局

公益財団法人 野口英世記念会

〒969-3284 福島県耶麻郡猪苗代町大字三ツ和字前田81番地

TEL:0242-85-7867

FAX:0242-23-7122

E-mail:office@noguchihideyo.or.jp

# 野口英世記念館・野口英世記念感染症ミュージアム案内

## 〔設立〕

1939年（昭和14）5月21日 野口英世記念館 開館  
1954年（昭和29）福島県第1号登録博物館  
2022年（令和4）7月2日 野口英世記念感染症ミュージアム開館

## 〔沿革〕

1928年（昭和3）5月21日野口英世博士が西アフリカで殉職した翌月、日本工業倶楽部で行われた追悼会に際し、「野口英世博士記念会」（記念会）が設立された。記念会は、翌年に生家の保存と二つの記念碑を建立、1938年（昭和13）には、文部大臣より財団法人の設立が許可され、その翌年の博士の命日に「野口英世記念館」が開館した。記念会は、2013年（平成25）4月、公益財団法人に移行し、2015年（平成27）4月には、新展示館をリニューアルオープンした。2019年（平成31）3月、生家が国の登録有形文化財に登録された。2022年（令和4）7月、「野口英世記念感染症ミュージアム」が開館した。

## ◆入館料金

〈野口英世記念館〉

○個人料金  
大人 800円  
子ども（小中学生） 400円

○団体料金（20名以上）  
大人 700円  
子ども 300円

○学生団体（学校引率）  
小中学生 300円  
大学・高校・各種学校 500円

○個人料金  
大人 600円  
子ども（小中学生） 300円

○団体料金（20名以上）  
大人 500円  
子ども 200円

○学生団体（学校引率）  
小中学生 200円  
大学・高校・各種学校 400円

〈2館共通券〉  
○個人料金  
大人 1300円  
子ども（小中学生） 600円

○団体料金（20名以上）  
大人 1100円  
子ども 450円

○学生団体（学校引率）  
小中学生 450円  
大学・高校・各種学校 850円

（2023年4月現在）

## 《ご利用案内》

### ◆開館時間

4月～10月

午前9時～午後5時30分

11月～3月

午前9時～午後4時30分

ただし最終入館は閉館30分前まで

### ◆休館日

〈野口英世記念館〉

年末年始（12月29日～1月3日）

〈感染症ミュージアム〉

12月1日～3月15日 冬季休館

## お問い合わせ

福島県耶麻郡猪苗代町三ツ和字前田 81

電話 0242(85)2319

ホームページ

<https://www.noguchihideyo.or.jp>

野口英世記念会報 第68号

公益財団法人野口英世記念会

発行日 2023年4月1日

発行人 倉根 一郎

編集人 森田 鉄平

〒969-3284

福島県耶麻郡猪苗代町大字三ツ和字前田 81

公益財団法人野口英世記念会

電話 0242(85)7867

FAX 0242(23)7122

E-mail [office@noguchihideyo.or.jp](mailto:office@noguchihideyo.or.jp)



公益財団法人 野口英世記念会